

一般国道157号線鶴来バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

松 任 市

# 末松遺跡群 I

2 0 0 4

石 川 県 教 育 委 員 会

(財) 石川県埋蔵文化財センター

すえ まつ  
末松遺跡群 I

2004

石川県教育委員会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は末松遺跡群本津遺跡の第1・2次発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は松任市の木津町地内である。
- 3 調査原因は国道157号鶴来バイパスであり、同事業を所管する建設省北陸地方建設局金沢工事事務所(現 国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は石川県立埋蔵文化財センター(以下県立埋文センター)が、昭和59(1984)年度から昭和61(1986)年度にかけて現地調査・出土品整理を実施した。平成14年度から平成15年度にかけて財団法人石川県埋蔵文化財センターが出土品整理・報告書刊行を実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査は昭和59・60(1984・1985)年度に実施した。期間・面積・担当者は下記のとおりである。
  - 第1次調査  
期 間 昭和59(1984)年5月21日～昭和59(1984)年11月29日  
面 積 3,000㎡  
担当者 西野秀和(主事)、三浦純夫(主事)
  - 第2次調査  
期 間 昭和60(1985)年7月17日～昭和60(1985)年12月14日  
面 積 1,125㎡  
担当者 米沢義光(主事)
- 7 出土品整理は昭和59年から昭和61年に県立埋文センターが石川県埋蔵文化財協会に委託して行った。平成14・15年度には財団法人石川県埋蔵文化財センターが行った。
- 8 図版編集の一部を(株)セピアスに委託して行った。
- 9 報告書の刊行は平成15(2003)年度に実施し、調査部調査第1課が担当した。本書の執筆は第1章を布尾和史(調査部調査第1課主任主事)が、そのほかの部分の執筆と編集は柿田祐司(調査部調査第1課主任主事)が行った。
- 10 調査には下記の機関、個人の協力を得た。  
国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、松任市教育委員会、北野博司
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
  - (3) 出土遺物番号は挿圖と写真で対応する。
  - (4) 遺物実測図については須恵器の断面は黒塗り、内黒土器はアミ、赤彩土器はドットで示した。

## 目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査の経緯	4
第1節 調査にいたるまで	4
第2節 第1次調査	4
第3節 第2次調査	4
第3章 調査の概要	6
第1節 グリッドの設定	6
第2節 第1次調査	6
第3節 第2次調査	6
第4章 遺構と遺物	7
第1節 遺 構	7
第2節 遺 物	48
第3節 土器の胎土分類と分析	74
第4節 小 結	83

### 挿図目次

第1図 木津遺跡の位置	1	第16図 遺構平面図5 (S = 1/100)	22
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)	2	第17図 遺構個別図6 (S = 1/40)	23
第3図 調査された木松遺跡群 (S = 1/5,000)	5	第18図 遺構個別図7 (S = 1/40・60)	24
第4図 グリッド設定図 (S = 1/1,000)	6	第19図 遺構個別図8 (S = 1/40)	25
第5図 遺構全体図 (S = 1/500)	8	第20図 遺構平面図6 (S = 1/100)	26
第6図 遺構平面図分別範囲図	12	第21図 遺構個別図9 (S = 1/40)	27
第7図 遺構平面図1 (S = 1/100)	13	第22図 遺構平面図7 (S = 1/100)	28
第8図 遺構平面図2 (S = 1/100)	14	第23図 遺構平面図8 (S = 1/100)	29
第9図 遺構個別図1 (S = 1/60・40)	15	第24図 遺構個別図10 (S = 1/40)	30
第10図 遺構平面図3 (S = 1/100)	16	第25図 遺構個別図11 (S = 1/40)	31
第11図 遺構個別図2 (S = 1/60)	17	第26図 遺構平面図9 (S = 1/100)	32
第12図 遺構個別図3 (S = 1/60)	18	第27図 遺構平面図10 (S = 1/100)	33
第13図 遺構個別図4 (S = 1/40)	19	第28図 遺構個別図12 (S = 1/60)	34
第14図 遺構平面図4 (S = 1/100)	20	第29図 遺構個別図13 (S = 1/40・60)	35
第15図 遺構個別図5 (S = 1/100)	21	第30図 遺構平面図11 (S = 1/100)	36

第31図	遺構個別図14 (S = 1/60)	37	第49図	遺物実測図8 (S = 1/3)	56
第32図	遺構平面図12 (S = 1/100)	38	第50図	遺物実測図9 (S = 1/3)	57
第33図	遺構個別図15 (S = 1/80)	39	第51図	遺物実測図10 (S = 1/3)	58
第34図	遺構平面図13 (S = 1/100)	40	第52図	遺物実測図11 (S = 1/3)	59
第35図	遺構個別図16 (S = 1/60)	41	第53図	遺物実測図12 (S = 1/3)	60
第36図	遺構平面図14 (S = 1/100)	42	第54図	遺物実測図13 (S = 1/3)	61
第37図	遺構個別図17 (S = 1/40)	43	第55図	遺物実測図14 (S = 1/3)	62
第38図	遺構平面図15 (S = 1/100)	44	第56図	遺物実測図15 (S = 1/3)	63
第39図	遺構個別図18 (S = 1/60)	45	第57図	遺物実測図16 (S = 1/3)	64
第40図	遺構個別図19 (S = 1/60)	46	第58図	遺物実測図17 (S = 1/3)	65
第41図	遺構個別図20 (S = 1/60)	47	第59図	遺物実測図18 (S = 1/3)	66
第42図	遺物実測図1 (S = 1/3)	49	第60図	遺物実測図19 (S = 1/3)	67
第43図	遺物実測図2 (S = 1/3)	50	第61図	遺物実測図20 (S = 1/3)	68
第44図	遺物実測図3 (S = 1/3)	51	第62図	遺物実測図21 (S = 1/3)	69
第45図	遺物実測図4 (S = 1/3)	52	第63図	遺物実測図22 (S = 1/3)	70
第46図	遺物実測図5 (S = 1/3)	53	第64図	遺物実測図23 (S = 1/3)	71
第47図	遺物実測図6 (S = 1/3)	54	第65図	遺物実測図24 (S = 1/3)	72
第48図	遺物実測図7 (S = 1/3)	55	第66図	遺物実測図25 (S = 1/3)	73

## 表 目 次

第1表	木津道跡周辺の道跡一覧表	3	第6表	出土遺物観察表4	79
第2表	出土土器の時期と胎土	75	第7表	出土遺物観察表5	80
第3表	出土遺物観察表1	76	第8表	出土遺物観察表6	81
第4表	出土遺物観察表2	77	第9表	出土遺物観察表7	82
第5表	出土遺物観察表3	78			

## 図 版 目 次

図版1	道跡近景 (南西から)、(北西から)	図版12	SB3
図版2	調査区全景 (1984年度調査区全景)	図版13	SB4
図版3	S11・2	図版14	SB5
図版4	SI3	図版15	SK1・2, 4~6
図版5	SI3 遺物出土状況	図版16	SK5~8, 11・12
図版6	SI4・5	図版17	SK14
図版7	SX1~3	図版18	SK15
図版8	SX3 遺物出土状況1	図版19	SK15・16・18・19
図版9	SX3・SX4 遺物出土状況	図版20	SK18~20ほか
図版10	SB1	図版21	遺物出土状況ほか
図版11	SB2	図版22~28	遺物写真

## 報告書抄録

ふりがな	まっとうしすえまついせきぐんいち							
書名	松任市末松遺跡群 I							
副書名	一般国道157号線鶴来バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名								
編著者名	柿田祐司、布尾和史							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 (TEL 076-229-4477)							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまついせき 木津遺跡 第1次調査	いしかわのほろ 石川県 松任市 きつこう 木津	17028	08012	36度 30分 4秒	136度 35分 45秒	19840521	3000㎡	道路建設
						19841129		
第2次調査						19850717 ～ 19851214	1125㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
木津遺跡	集落跡?	弥生時代		弥生土器				
	集落跡	古墳時代	竪穴建物跡 土坑	土師器・須恵器				
	集落跡	古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 溝	土師器・須恵器・墨書 土器・石製品				
	集落跡?	近世		肥前系陶磁器				

## 第1章 位置と環境

木津遺跡は石川県松任市木津町に所在し、白山に源を発する手取川により形成された手取川扇状地に立地する。手取川扇状地上においては、古くは縄文時代後期から人々が暮らした痕跡を捉えることができ、松任市旭遺跡や、金沢市米泉遺跡、野々市町御経塚遺跡など、堅穴建物跡や石囲炉といった遺構を伴う集落遺跡が扇状部付近で確認される。また、扇状部東側でも金沢市馬替遺跡や野々市町三納アラムヤ遺跡(81)などのように縄文時代後期の遺物がまとまって出土する例が知られているほか、野々市町三納トヘイダゴシ遺跡(79)、富樫館跡遺跡群のように土器片や打製石斧などが散発的に出土するのみの遺跡も数多く確認されている。このような遺物のみ出土する遺跡は、縄文時代晩期になると西側にも拡がる傾向を示し、以降弥生時代前期にいたるまで、扇状地上で発掘される多くの遺跡で認められるようになる。遺構を伴う遺跡は乾町遺跡(3)下層などこくわずかに認められるのみとなっている。

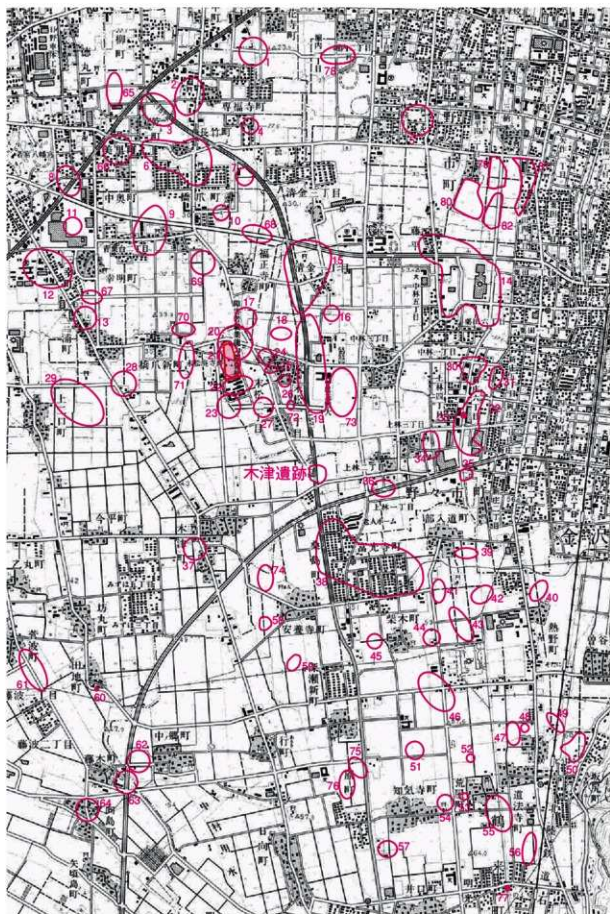
水田耕作を基盤とする社会形態を志向し始めた弥生時代中期頃になると、周辺の遺跡分布は手取川扇状地扇状部や松任平野沖積地など低地を求め際立った偏りを示す。松任市野本遺跡、八田中ヒエモンド遺跡、横江古屋敷遺跡、金沢市下安原遺跡、上荒屋遺跡など堅穴建物跡を居住施設とする集落跡を中心に、小規模な遺跡もその周辺で発掘されており、大規模な灌漑を要しない低湿地域での初期稲作農耕のあり方を垣間見せる形となっている。その後、弥生時代後期から古墳時代前期には、低地での集落数や建物数の増加が認められるようになり、松任市旭遺跡や野々市町御経塚シンデン遺跡のような墳墓群も作られるようになった。一方、扇状地扇状部では、野々市町上新庄ニシウラ遺跡(35)や末松廃寺(21)など、居住施設を伴う集落が出現し、小規模ながらも扇状地上を流れる河川と結びついた形で集落の運営が開始されることとなる。ただ、その規模は小さいままで推移したのらしく、古墳時代中・後期・飛鳥時代にいたっても、上林新庄遺跡(32)や上林テラダ遺跡(34)、末松ダイカン遺跡(20)での建物跡数基からなる集落跡や、横穴式石室の基礎部が調査された上林古墳(33)などがわずかに見られる程度であり、低地とは対照的な様相を呈していた。

奈良時代直前頃から奈良時代にかけては遺跡の増加と大規模化により、扇状地開発が本格化した時期と捉えられている。これは在地の新興開発領主層の成長とそれに伴う労働力の組織化が扇状地扇状部地域で顕著に進んだことによるものと考えられており、木津遺跡周辺で、きほど距離をおかずには大規模な遺跡群が群在する状況を確認できる。現在も流れる七ヶ用水の名称に準じた水系名を付して整理すると、富樫用水系では多数の建物跡が検出された下新庄アラチ遺跡(30)と上林新庄遺跡(32)を中心として、上新庄ニシウラ遺跡(35)、下新庄タナカタ遺跡(31)、粟田遺跡(14)などからなる遺跡群があり、郷用水系では東側に末松廃寺(21)とその周辺で展開する末松ダイカン遺跡(20)、末松福正寺遺跡(17)、末松A遺跡(19)、木津遺跡などが一群をなし、西側には三浦遺跡(12)、幸明遺跡(11)、上二口遺跡(29)が水系単位でまとまった遺跡群を形成する。こうした状況は平安時代にもしばらく継続し、平安時代の中頃から後半にかけて縮小、廃絶していくようである。

その後新たに扇状地扇状部での活動が目立つようになるのは、平安時代の後半からであり、周辺では橋爪ガンノアナ遺跡(9)、三浦遺跡(12)、幸明遺跡(11)、安養寺遺跡(38)、知気寺遺跡(51)



第1図 木津遺跡の位置



第2図 遺跡の位置と周辺の道跡 (S = 1/25,000)





などが認められる。

中世の集落に関しては状況が明らかなものは少なく、近年の発掘調査により、三浦遺跡（12）、野々市町の三納ニシヨサ遺跡（82）や三納トヘイダゴシ遺跡（79）、粟田遺跡（14）など、掘立柱建物跡や堅穴状遺構を組成する集落跡が検出されている事例が散見されるのみとなる。

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査に至るまで

国道157号線は、野々市町から鶴米町の区間で家屋が続き道幅も狭く、きついカーブの箇所も多かったため、交通の混雑や安全確保を図る必要があった。昭和45年度に「鶴米バイパス」の計画線調査が着手され、昭和49年度に事業化がなされた。鶴米バイパスとは、松任市乾町～石川郡鶴米町白山町までの延長13.2kmをいう。そして昭和52年度に工事着手となり、鶴米バイパス関連の埋蔵文化財発掘調査では、「白山町遺跡」「安養寺遺跡」等が行われている。昭和55年度から昭和58年度までに鶴米町白山町から安養寺町までの区間が暫定2車線供用されている。本調査は加賀産業道路から一般国道8号線に接続するおよそ3kmの工事に伴うものである。

### 第2節 第1次調査

建設省北陸地方建設局金沢工事事務所（現 国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所）の依頼を受け、昭和59年5月21日より現地調査に着手している。当初の依頼面積は1000㎡である。その範囲は調査区内を斜めに横切る用水までであった。その後8月21日に事業の進捗を図るためとし、用水の北側2000㎡の追加依頼があり合計3000㎡の発掘調査となった。遺構の測量には調査区3000㎡を対象とし、空中写真測量が行われている。主な遺構としては、当初の1000㎡の範囲からは堅穴建物や、追加部分の2000㎡からは掘立柱建物跡が検出されている。遺物は弥生・古墳・古代・中世・近世と出土している。

### 第3節 第2次調査

第1次調査と同じく依頼を受け、昭和60年7月17日より現地調査に着手している。依頼当初の面積は6000㎡であった。依頼のあった範囲は第1次調査の北側部分等であった。

その後、調査依頼区域の遺構等の残存状態が良くなく、試掘調査を実施して調査区域の決定をし、発掘調査区の変更をする旨の協議が行われた。そして、昭和59年度調査の北側部分1125㎡（本津遺跡第2次調査）と2600㎡（末松A遺跡第1次調査）とその間のトレンチ調査975㎡に変更となった。

遺構の測量にはヘリコプターによる空中写真測量が行われており、トレンチ調査部分を除いた範囲を対象として行われている。

検出された主な遺構は、第1次調査区から延びる掘立柱建物跡等があるが、北側へ行くほど遺構が疎らになっている。



第3図 調査された末松遺跡群 (S = 1 / 5,000)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 グリッドの設定

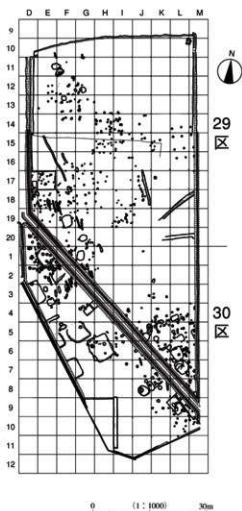
発掘調査区には、工区のセンター杭を縦軸としてそこから横軸を設定し、5 mグリッドを組んで調査が行われている。工区の名称である29区、30区を大グリッドとし5 mグリッドを小グリッドとしている。この工区ごとの名称は、同じ事業で発掘調査された末松A遺跡でも踏襲されている。小グリッドは南北方向を数字、東西方向をアルファベットとしている。北に向かって北西の杭がその小グリッドの名称となる。

### 第2節 第1次調査

30区および29区の15ライン以南が調査範囲となる。竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝等が確認されている。それらの時期は、竪穴建物が古墳時代後期から奈良時代前半頃までと考えられ、掘立柱建物は、古墳時代後期以降平安時代前期頃までと考えられる。D・E17グリッドでは下層の調査が行われており、ピット等の遺構と弥生土層が確認されている。

### 第3節 第2次調査

29区の14ライン以北が調査範囲となる。掘立柱建物跡のほか、土坑が確認されている。北側に向かって遺構が希薄となり、遺跡は途切れると判断されている。



第4図 グリッド設定図

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 遺 構

第1次調査および第2次調査を合わせて、検出された主な遺構は、竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡6棟、土坑20基、溝16条、ピット多数等である。建物跡の棟数については当然のことながら復元した数である。また掘立柱建物跡は、調査時の段階では5棟復元されていたが、SB6とした1棟を图上復元した。さらに復元することも可能ではあったが、調査時の所見を優先しそれ以上の建物跡の復元はあえてしなかった。それぞれの時代については、それらの遺構から出土する遺物の年代観によって決定した。ただし、掘立柱建物跡については柱穴と考えられるピットからの出土遺物がほとんどないため、包含層遺物による場合もある。

以下竪穴建物跡、落ち込み状遺構、掘立柱建物跡、土坑、溝の順に遺構の説明を行う。

#### 竪穴建物

調査時、竪穴建物として認識されていたのは5棟である。そのほか、SX3・4などの落ち込み状遺構として捉えられているものも竪穴建物の可能性が高いと考えられるので、この項で報告する。

**SI1** (第7・9・42図) 30L9で検出されている。規模は調査区を斜めに横切る用水のため不明である。東西方向1辺は約6.6mを測る。深さは約20cmである。平面形態は方形である。主柱穴となるようなピットは見当たらない。図化した出土遺物には1がある。須恵器杯B蓋であり、II3期(田嶋1988、以降特に断らない限り○期は田嶋編年による)と考えられる。

**SI2** (第7・9・42図) 30L9で検出されている。SI1と切り合うが、新旧関係は不明。図化した出土遺物には2・3がある。3の土師器甕は混入と考えられる。2の須恵器杯B蓋は、SI1出土のものよりやや後出的な様相をもちⅡ期と考えられる。竪穴の規模は、SI1と同じく用水のため不明である。東西方向の1辺は約4.5mを測る。深さは約20cmである。平面形態は方形である。主柱穴となるようなピットは見当たらない。第7図中に描き入れたラインにピットが並ぶことから、竪穴外に柱穴が並ぶタイプとも考えられる。

**SI3** (第16・18・42・43図) 30H6で検出されている。SI3P1～3のピットがあるが主柱穴とは考えがたい。規模は長辺約3.9m、短辺約3.3mを測る。深さは約40cmである。平面形態は方形である。貼床が検出されている。多数の遺物が出土しているが、古墳時代中期頃とI1期頃のⅡ期と考えられる。この竪穴建物に付くのはI1期の遺物であろうか。

**SI4** (第16・17・43図) 30F6で検出されている。調査区外に延びているため全形は不明である。平面形態は方形になると考えられる。深さは約25cmを測る。22～29の遺物が出土している。22～25は6世紀代の遺物と考えているが、26～28は5世紀代、29は弥生時代と考えられる。竪穴建物の帰属時期は5ないし6世紀代と考えられるが、決定はできない。

**SI5** (第16・17図) 30F5で検出されている。竪穴建物の壁周溝のみ検出されている。調査区外に延びるためその全形については不明である。壁周溝の深さは約10cmである。時期については不明である。



第5圖 遺構全体図

### 落ち込み状遺構

- SX1** (第20・21図) 30F2で検出されている。長軸約3.6m、短軸約2.8mを測る。深さは約30cmである。平面形態は方形に近いが、調査区を斜めに横切る用水にまで延びるようである。全形は不明である。
- SX2** (第20・21・52図) 30C2で検出されている。調査区外に延びているため全形は不明である。調査区内では長軸約5.9mを測る。深さ約25cmである。117～120の遺物が出土している。118のような弥生時代末頃の遺物も混じるが、119・120は1期の遺物と考えている。
- SX3** (第23・25・51) 30E1で検出されている。調査区を斜めに横断する用水にまで延びているためその全形と規模は不明である。深さは約20cmである。遺構内にピットがあり柱穴となると考えられるが堅穴建物となるか判然としない。可能性はあろう。102～116の遺物が出土している。114～116はⅡ2期頃の遺物と考えられる。102～113は5世紀後半代と考えられる。堅穴建物とすれば、5世紀後半代であろう。
- SX4** (第16・19・52図) 30F5で検出されている。長軸約5.0m、短軸約4.6mを測る。深さは約20cmである。堆積土中には、炭化物や焼土ブロック等が含まれている。121～132の遺物が出土している。5世紀代の時期と考えられる。おそらく堅穴建物になると考えている。

### 掘立柱建物跡

- SB1** (第14・15図) 30K4～5にかけて検出されている。1×2間の掘立柱建物である。柱穴の中心を測り、梁桁約3.0m×桁約3.4mである。平面積は約10m<sup>2</sup>である。建物の主軸方位は、東に約40°振っている。中央にある長軸約2.1m、短軸約1.2mを測る方形の土坑もこの建物に属すると考えられる。建物の時期については不明である。周辺の遺構や包含層の出土遺物からみると古代前半と考えられる。
- SB2** (第27・28図) 29F16～H18にかけて検出されている。2×4間の総柱建物である。柱穴の中心を測り、梁桁約4.8m、桁約約9.9mである。平面積は約47m<sup>2</sup>である。建物の主軸方位は西へ約15°振っている。その時期については、柱穴から遺物が出土していないようであると判然としない。
- SB3** (第30・31図) 29L14～M16にかけて検出されている。第1・2次調査と2か年に渡って調査された。調査区外に延びている可能性もあるが、2×3間の総柱建物として報告する。柱穴中心を測り、梁桁約7.9m、桁約約4.9mである。平面積は約39m<sup>2</sup>である。桁桁の中間部分が約3.3mと広がる建物構造をもっている。建物の主軸方位は西へ約16°振っている。建物方位からはSB2と同じ頃の建物と推測できる。
- SB4** (第34・35図) 29F12～G14にかけて検出されている。建物の北西側の柱穴が検出されていないが、2×4間の総柱建物として報告する。2つずつ柱穴が並んであることから1回の建て替えが考えられる。古いほうが柱穴中心を測り、梁桁約4.4m、桁約約8.5mである。新しいほうが梁桁約4.5m、桁約8.6mである。平面積はそれぞれ約37m<sup>2</sup>、約39m<sup>2</sup>となる。やや拡張されるようだがそれほど規模は変わらない。建物の主軸方位は西へ約11°振っている。
- SB5** (第32・33図) 29H13～I16にかけて検出されている。これもSB2と同じく2か年に渡って調査されている。ピットが多数検出されており、複数の建物が立つ可能性はあるが、ここでは2×3間の総柱建物に東西に庇が付き、北側に塀がある状態を復元した。庇部分を入ると梁桁約6.0m、桁約約8.4mを測る。平面積は約50m<sup>2</sup>である。建物の主軸方位は西へ約13°振っている。
- SB6** (第10・11図) 30K7で検出されている。この掘立柱建物は図上復元したもので調査時には認

識されていない。調査区内を流れる用水により全景は不明であるが、1×2間か2×2間の総柱と考えられる。梁桁約3.4m、桁桁約4.2mを測る。平面積は約14㎡となる。建物の主軸方位は東西方向を基準とし北方向に約38°振っている。周辺の遺構および包含層から出土している遺物を見るとⅢ～Ⅴ期の間に収まるものと考えられる。

**その他** 掘立柱建物は、復元した数以上にあったと考えられる。SB1周辺にあるピット群も柱穴であると考えられ、2・3棟の建物があったと推測している。またSX3周辺にも多数のピットがあり柱穴もあると考えられるので、2・3棟の建物があったと推測している。

SB3～5の時期については明確にしきれないが、包含層の出土遺物を見るとⅤ～Ⅶ期のものが多く、掘立柱建物が側柱ではなく総柱となっていることから、Ⅶ期の建物かもしれない。

## 土 坑

**SK1** (第8・9・44図) 30J8で検出されている。長軸約2.9m、短軸約2.3mを測る。深さは約40cmである。平面形態は隅丸方形である。30～40の遺物が出土している。Ⅲ期を中心とした時期と考えられる。

**SK2** (第8・9図) 30J8で検出されている。長軸約2.4m、短軸約1.4mを測る。深さは約20cmである。土坑内にあるピットの深さは、約50cmとなる。平面形態は方形である。固化できるような遺物は出土していない。

**SK3** (第16・18・45図) 30F5で検出されている。平面形態はかなり不定形だが、長軸約2.3m、短軸約1.0mを測る。深さは約40cmである。断面形態は方形を呈する。41の遺物が出土している。

**SK4** (第20・21・45図) 30E3で検出されている。長軸約1.3m、短軸約0.8mを測る。深さは約25cmである。平面形態は楕円に近い。42の遺物が出土している。

**SK5** (第10・12・46図) 30L7で検出されている。長軸約3.5m、短軸約3.3mを測る。深さは約30cmである。平面形態は隅丸方形である。43～46の遺物が出土している。Ⅲ～ⅣI期と考えられる。

**SK6** (第10・12・46図) 30L6で検出されている。長軸約3.6m、短軸約2.7mを測る。深さは約25cmである。平面形態はやや不定形な形を呈するが、隅丸方形と考えられる。48～52の遺物が出土している。SK5より出土している遺物よりも古くⅡ3～Ⅲ期と考えられる。47・53の出土遺物はSK5・6どちらの遺構に属するは不明であるが、時期を考えるとSK5に付くと考えられる。

**SK7** (第10・13・47図) 30L7で検出されている。長軸短軸とも約0.9mを測る。深さは25cmである。平面形態は方形である。54の遺物が出土している。古墳時代後期の龕と考えられる。

**SK8** (第10・13図) 30K6で検出されている。長軸約1.4m、短軸約0.9mを測る。深さは約30cmである。平面形態は隅丸方形である。固化できるような遺物は出土していない。

**SK9** (第10・13図) 30L5で検出されている。全形は明らかとなっていないのでその規模については不明だが、平面形態は方形になると考えられる。短辺となると考えられる長さは約1.6mを測る。深さは約20cmである。固化できるような遺物は出土していない。

**SK10** (第10・13・47図) 30M5で検出されている。調査区外に伸びるため全形は不明である。平面形態は隅丸方形と考えられる。深さは約25cmである。55の遺物が出土している。

**SK11** (第10・13図) 30K5で検出されている。直径約1.3mを測る。深さは約30cmである。平面形態は円形を呈する。固化できるような遺物は出土していない。

**SK12** (第10・13・47図) 30J5で検出されている。長軸約3.0m、短軸約1.2mを測る。深さは最も深いところで約60cmである。不定形な平面形態を呈する。56・57の遺物が出土している。



- SK13** (第23・24図) 30G1で検出されている。長軸約2.4m、短軸約1.8mを測る。深さは約10cmである。図化できるような遺物は出土していない。
- SK14** (第23・24・47図) 29G20で検出されている。長軸約2.0m、短軸約1.5mを測る。深さは約25cmである。平面形態は楕円形に近い。58～60の遺物が出土している。Ⅳ期を中心とした時期と考えられる。そのほか図化はされていないが、竈の羽口が出土している。
- SK15** (第23・24・47図) 29F19で検出されている。長軸約3.0m、短軸約2.5mを測る。深さは約15cmである。平面形態は隅丸方形である。61～66の遺物が出土している。Ⅰ期を中心とした時期と考えられる。その規模や焼土等から竪穴建物である可能性もある。
- SK16** (第27・29・47図) 29F17で検出されている。長軸約1.5m、短軸約0.8mを測る。深さは約40cmを測る。平面形態は方形を呈する。67・68の遺物が出土している。68が混じりであると考えられる。67の時期をとれば中世Ⅰ～Ⅱ期と考えられる。
- SK17** (第27・29図) 29G17で検出されている。長軸約1.2m、短軸約0.65mを測る。深さは約25cmである。平面形態は、崩れてはいるがもともと方形であったと考えられる。図化されている遺物はない。SB2の内部にあり付属施設の可能性もある。SK16およびP56とも形態が似通っており、同様な性格を有しているかもしれない。想定しうる性格の一つに土坑墓が考えられる。
- SK18** (第36・37・48図) 29E11で検出されている。長軸約2.2m、短軸約1.4mを測る。深さは約30cmである。平面形態はかなり形が崩れているが、隅丸方形と考えられる。69～72の遺物が出土している。遺物の時期はⅤ1～Ⅴ11と考えられる。
- SK10** (第34・35図) 29F13で検出されている。一辺約1.1mの方形を呈する。SB14と関連する遺構の可能性もある。いわゆる竪穴状遺構と考えられる。
- SK20** (第36・37・48図) 29F11で検出されている。長軸約2.1m、短軸約1.5mを測る。深さは約20cmである。平面形態はかなり不定形である。73～78の遺物が出土している。時期はⅤ11期と考えられる。石が土坑中からかなりの量検出されていることから、遺構の性格の一端を示すものと考えられる。

## 溝

- SD1** (第20図) 30F3で南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD2** (第20図) 30F2・3で南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD3** (第20図) 30G2・3で南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。SD1・2および周辺の南北方向に検出されている溝群は、畝の畝溝と考えられる。その時期については不明であるが、包含層出土遺物からおそらく古代と考えられる。
- SD4** (第20図) 30G2で南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。これも畝の畝溝と考えられる。
- SD5** (第23図) 29H20～30H1にかけて南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD6** (第23図) 29G19～G20にかけて南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD7** (第27図) 29F18～F19にかけて南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD8** (第27図) 29F18～F19にかけて南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD9** (第27図) 29E18～E19にかけて南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。
- SD10** (第27・52図) 29E18～E19にかけて南北方向に検出されている。133の遺物が出土している。
- SD11** (第27図) 29E18で南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。SD7～11は南北方向に並ぶ溝群であり、その性格として畝の畝溝と考えられる。

**SD12** (第27・32図) 29E14～29F17にかけて北西から南東方向にかけて検出されている。図化されている遺物はない。

**SD13** (第27・32図) 29F16で北西から南東方向にかけて検出されている。図化されている遺物はない。SD14とほぼ平行に並ぶので、関連性が考えられる。

**SD14** (第26図) 29J17～J18にかけて南北方向に検出されている。図化されている遺物はない。この溝に沿って並ぶピットがあり、関連性が考えられる。

**SD15** (第26図) 29M18～K19にかけて北東から南西に向けて検出されている。図化されている遺物はない。

**SD16** (第22図) 29K20～M20にかけて東西方向に検出されている。図化されている遺物はない。

### そのほかの遺構等

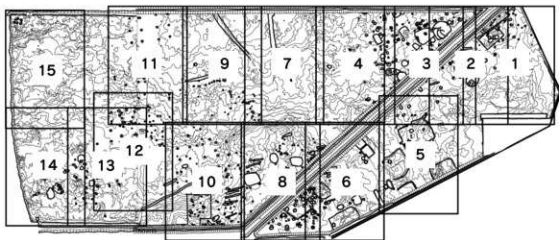
**P11** (第16・18・49図) 30F5で検出されている。直径約0.9mを測る。平面形態は円形である。83の遺物が出土している。

**P36** 30K6で検出されている。直径約1.0mを測る。平面形態は円形である。88の遺物が出土している。Ⅲ期頃と考えられる。

**P39** 30K3で検出されている。長軸約0.5m、短軸約0.4mを測る。平面形態は方形である。90の遺物が出土している。

**P56** (第27・29図) 29D18で検出されている。長軸約1.6m、短軸約0.8mを測る。深さは約25cmである。平面形態は隅丸方形を呈する。土坑の項でもふれたが、SK16・17と似通っており、土坑壘という可能性も考えられる。

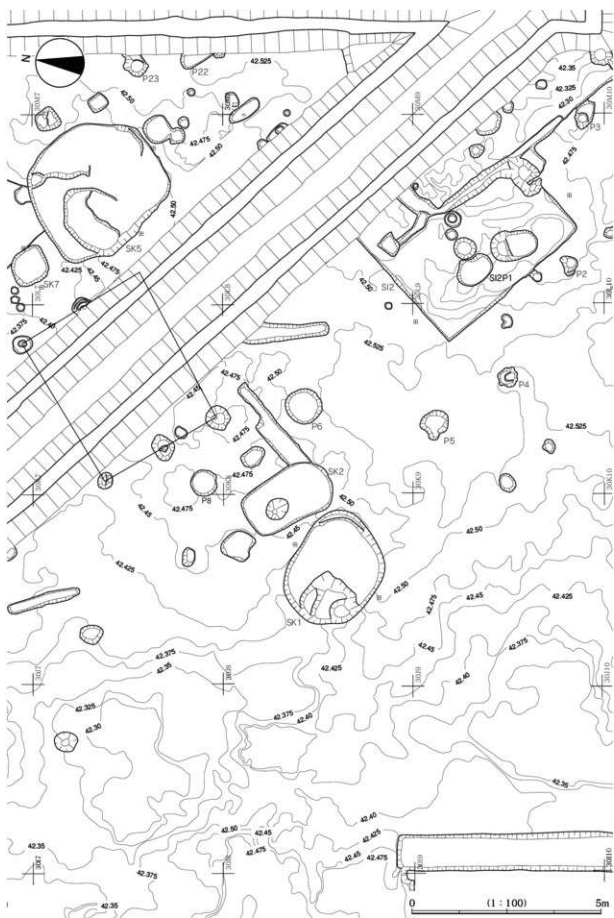
**下層確認トレンチ** (第27・29図) D・E17に設定されている。このグリッドから弥生時代後期後半～末の遺物が一定量出土したことからトレンチが入れられたものとみられる。ピット等が確認されており、この時期の集落があった可能性もある。



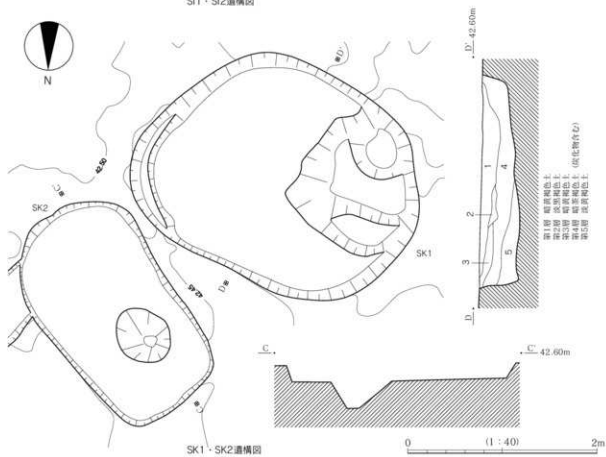
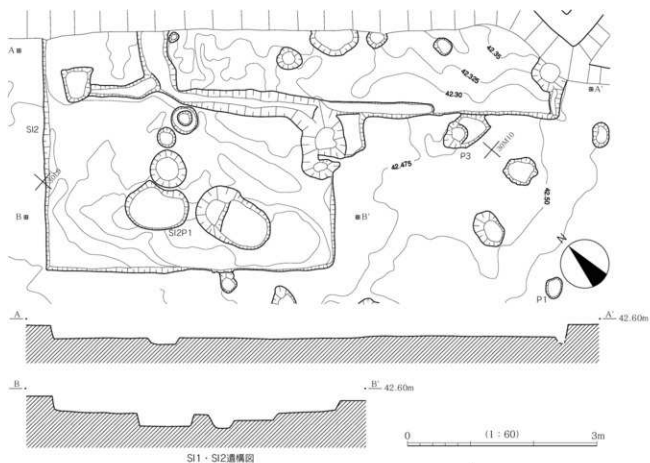
第6図 遺構平面図分割範囲図



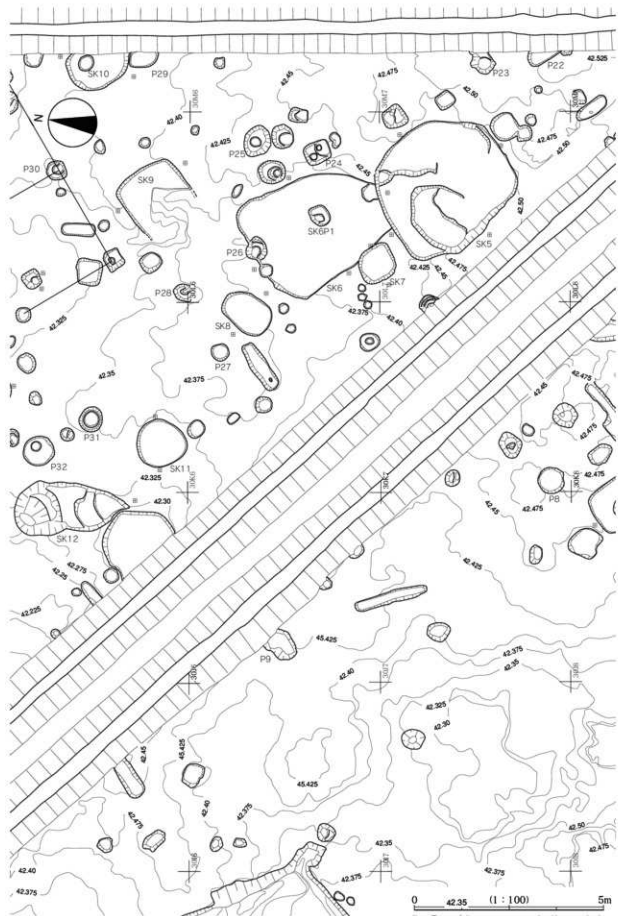
第7図 遺構平面図1



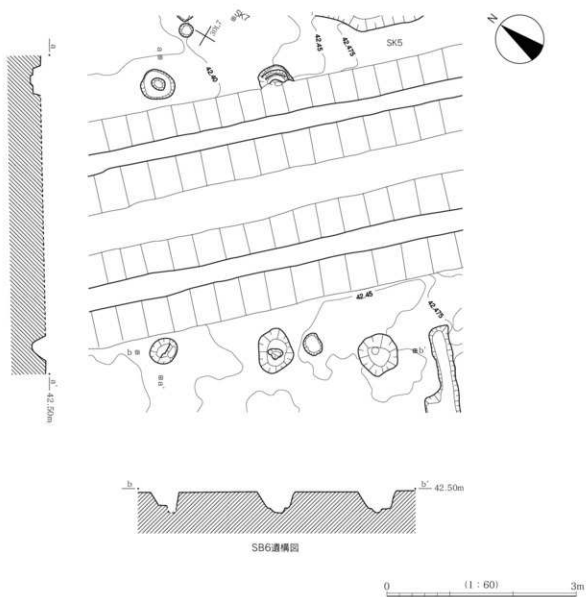
第8図 遺構平面図2



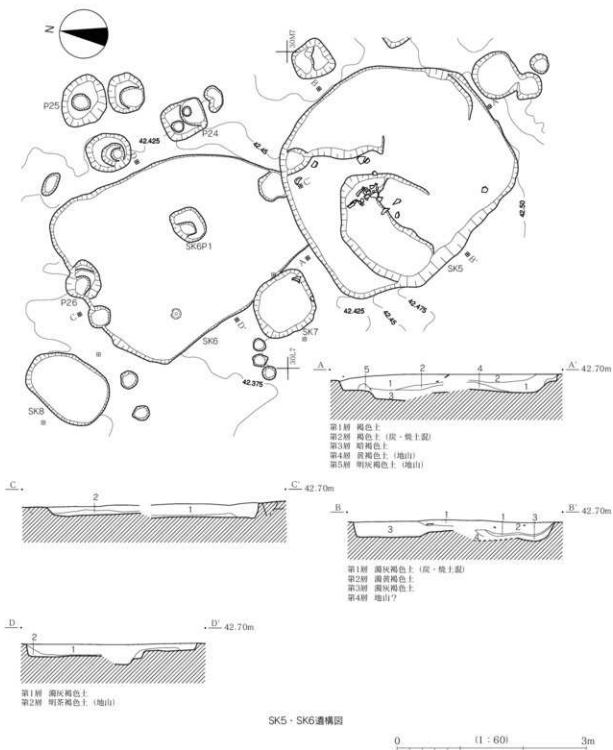
第9図 遺構個別図1



第10図 遺構平面図3

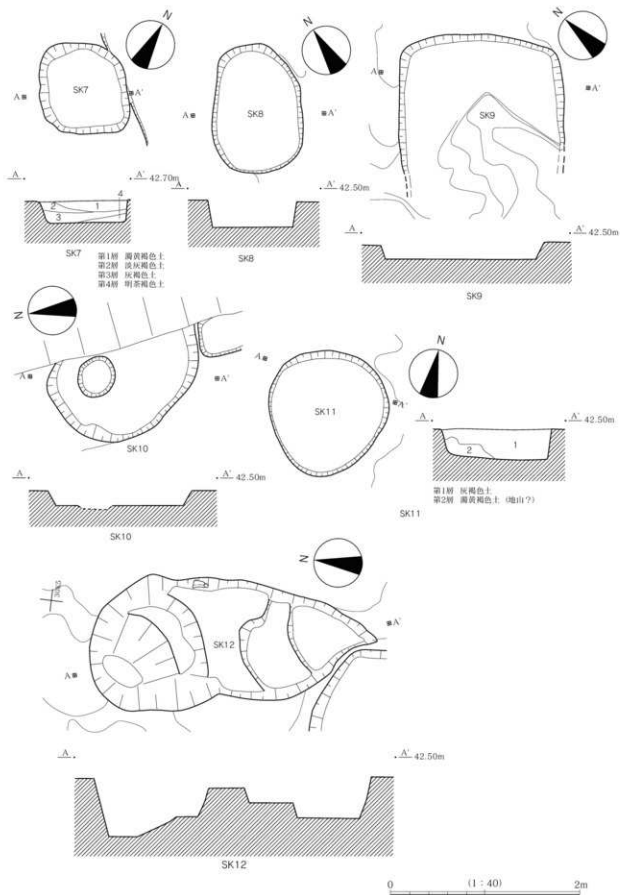


第11図 遺構個別図2

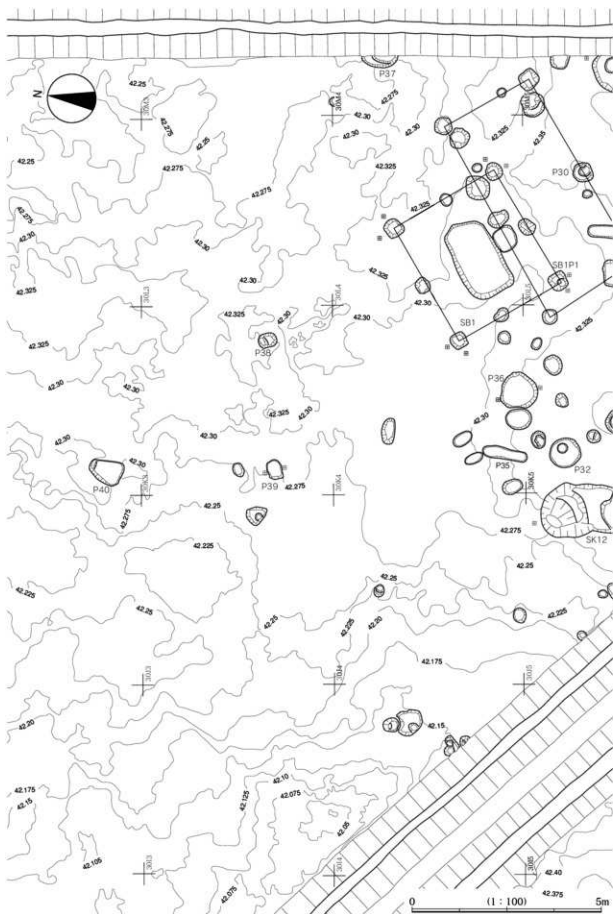


第12図 遺構備列図3

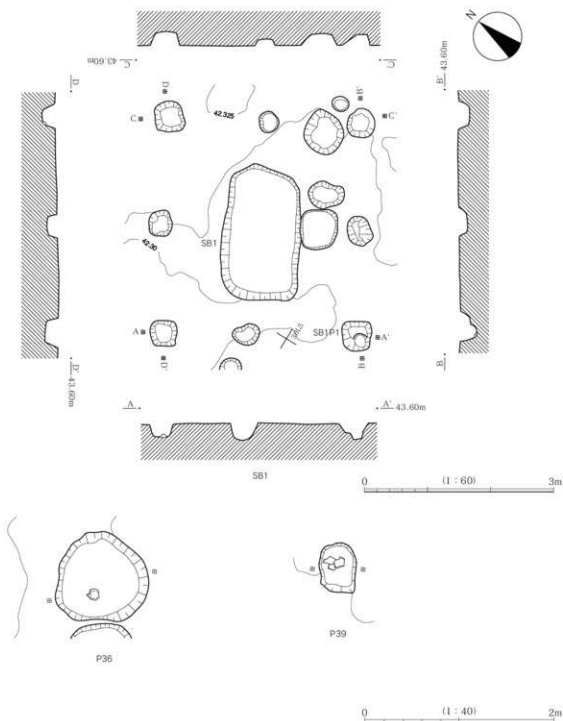




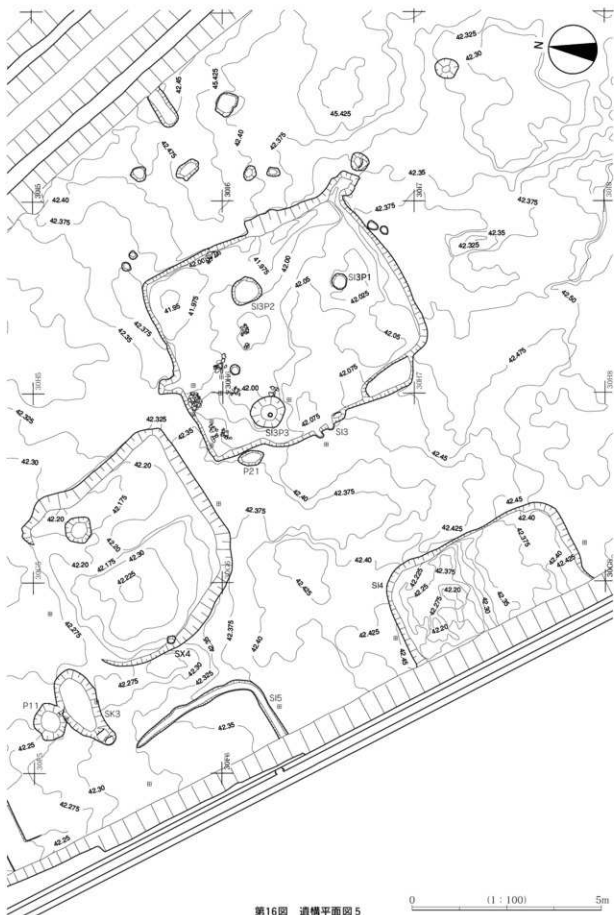
第13図 遺構個別図4

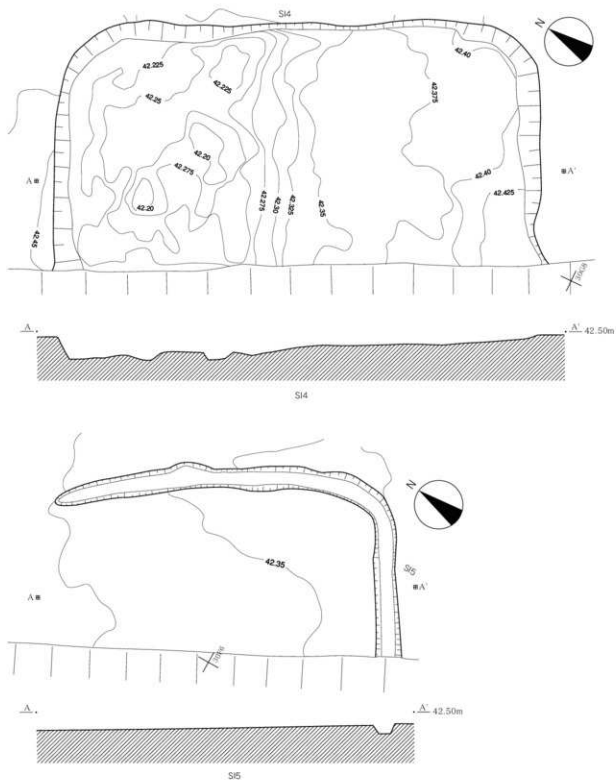


第14図 遺構平面図4



第15図 遺構個別図5

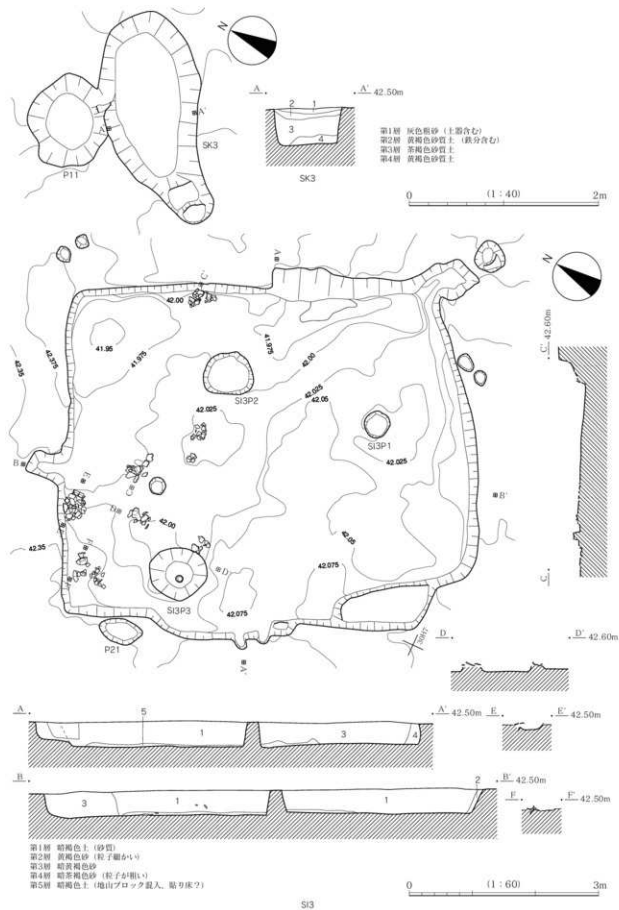




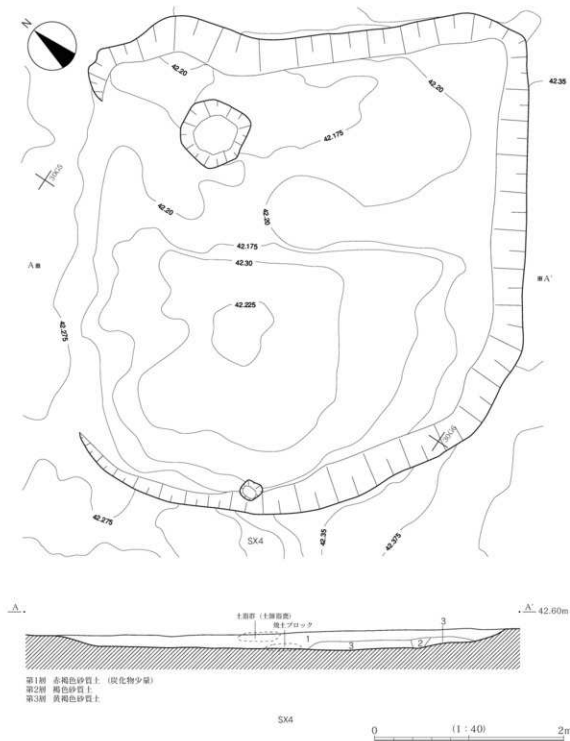
0 (1:40) 2m

第17図 遺構個別図6

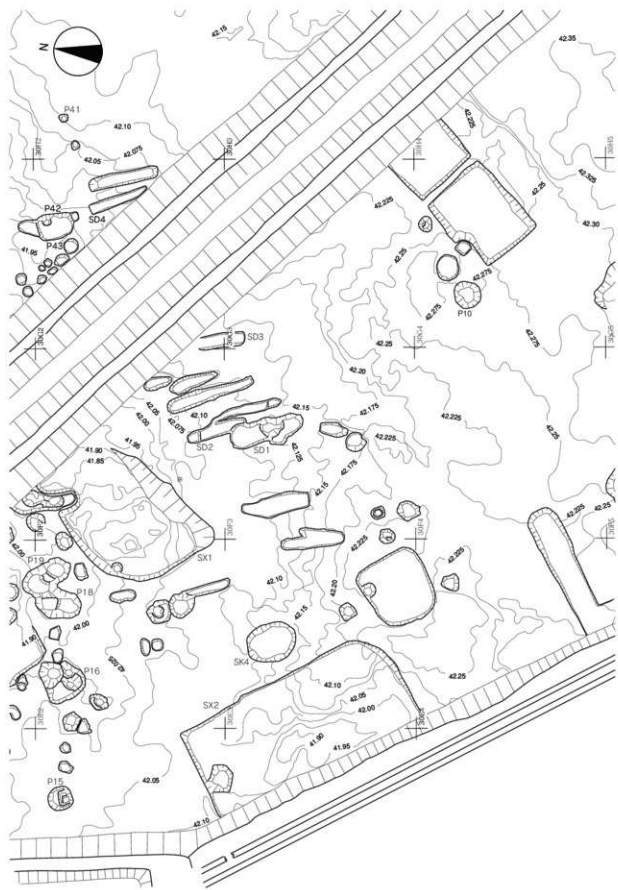
第1節遺構



第18図 遺構個別図7



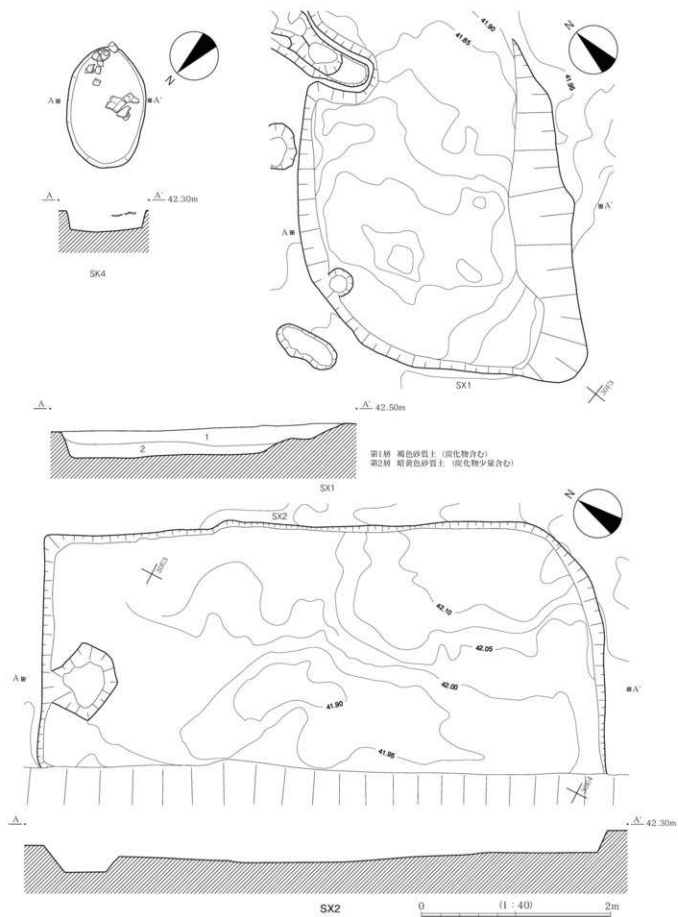
第19図 遺構備別図8



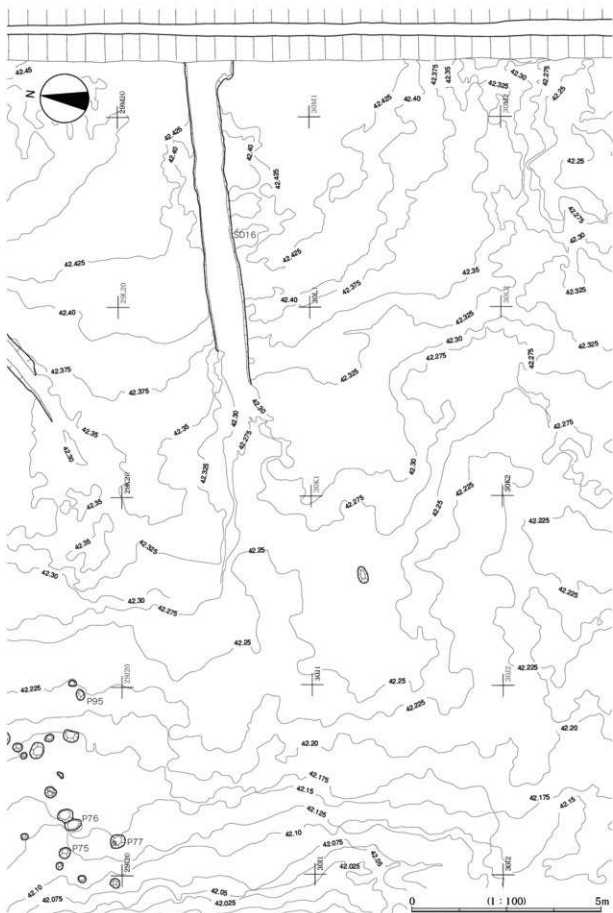
第20図 遺構平面図6

0 (1:100) 5m

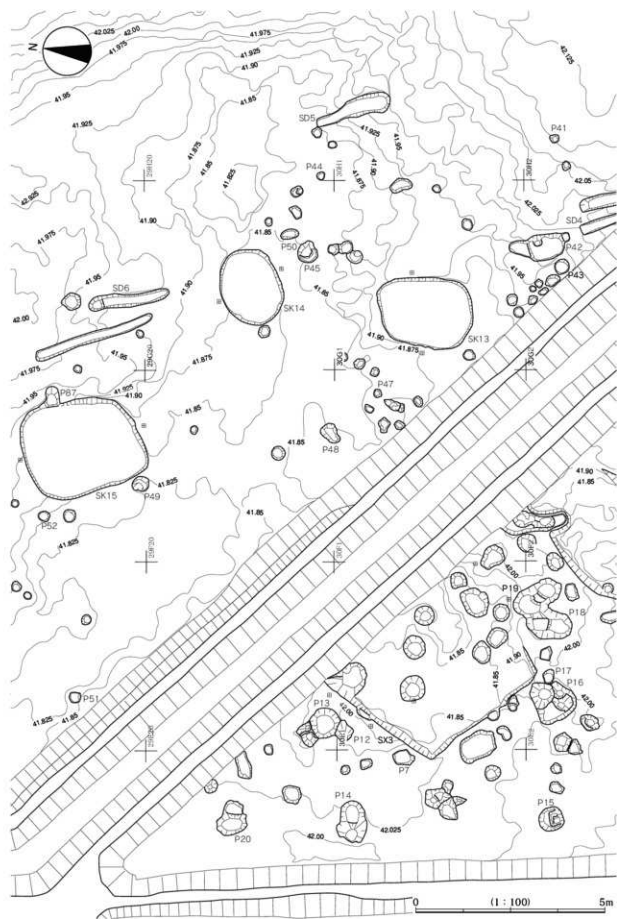




第21図 遺構備例図9

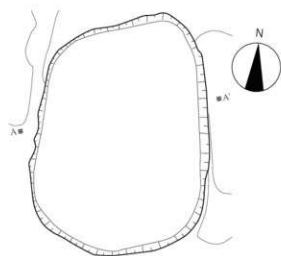


第22圖 遺構平面図7

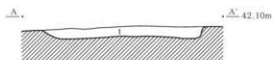


第23図 遺構平面図 8

第1節 遺構

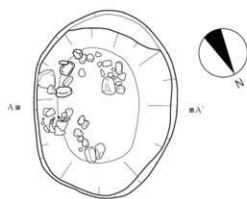


SK13

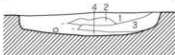


第1層 暗褐色土 (炭化物混)

SK13

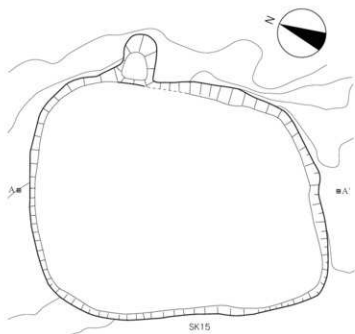


SK14



第1層 暗灰褐色土 (炭化物含少)  
第2層 黄褐色土  
第3層 褐色土 (炭化物、焼土含少)  
第4層 黄褐色土

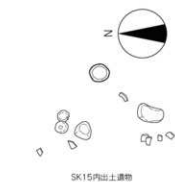
SK14



SK15



SK15

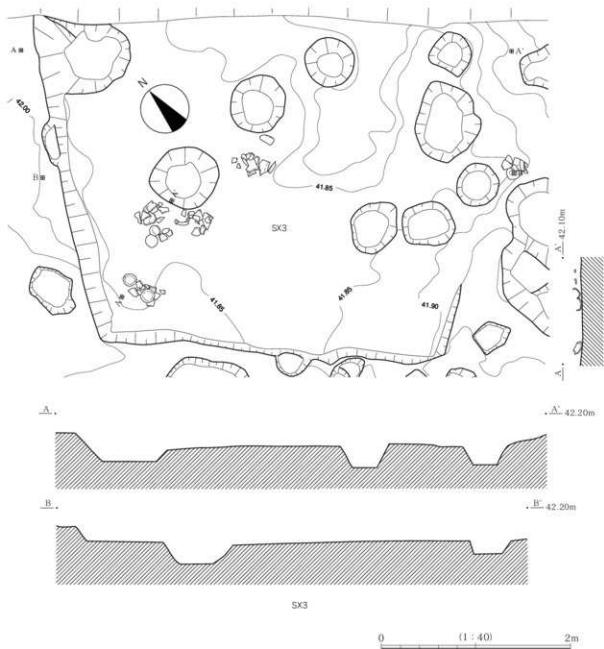


SK15内出土遺物

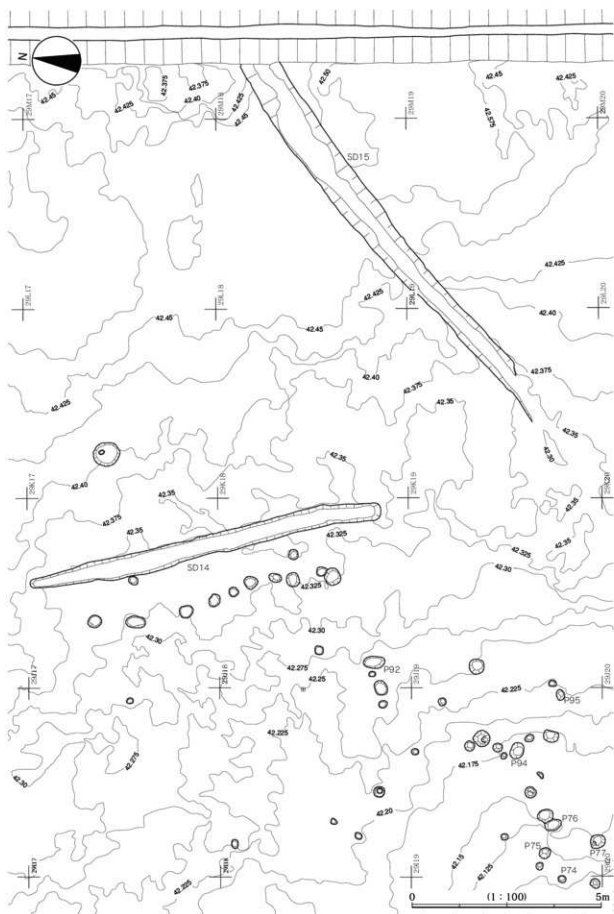
第1層 灰褐色土  
第2層 黄褐色土 (灰・焼土)  
第3層 暗黄褐色土  
第4層 茶褐色土

0 (1:40) 2m

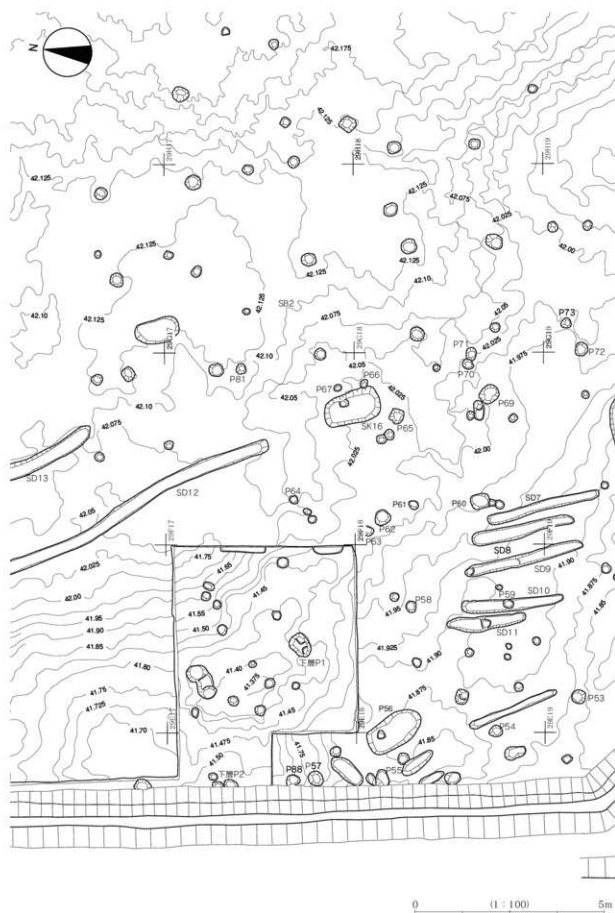
第24図 遺構個別図10



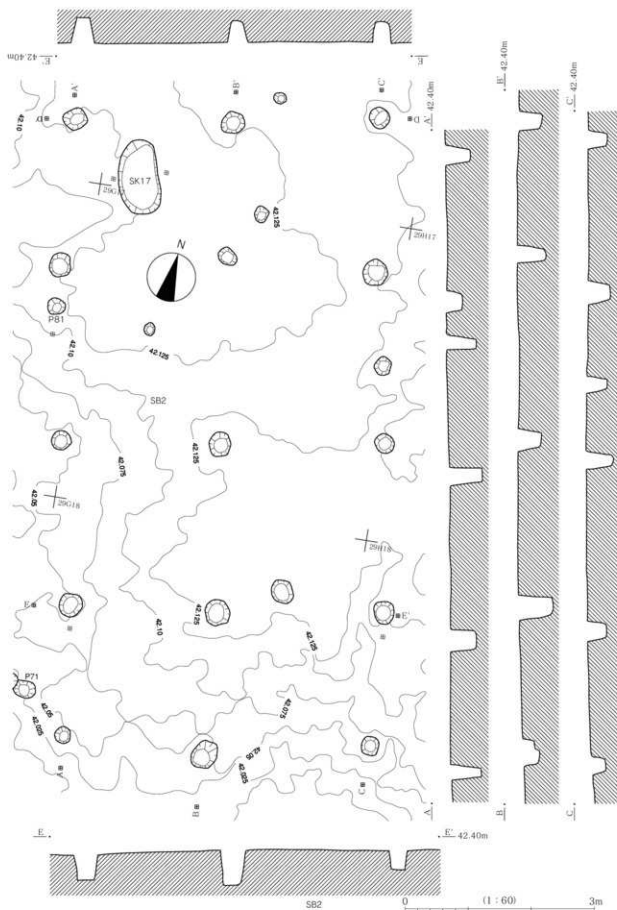
第25図 遺構平面図11



第26図 遺構平面図9

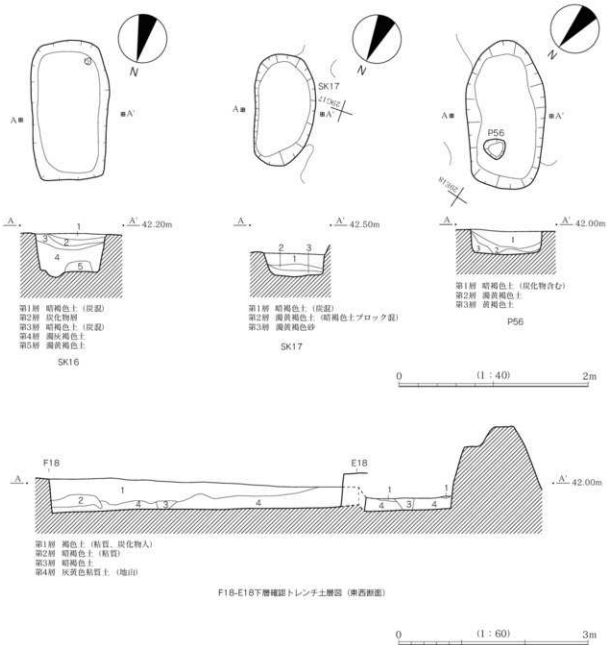


第27図 遺構平面図10

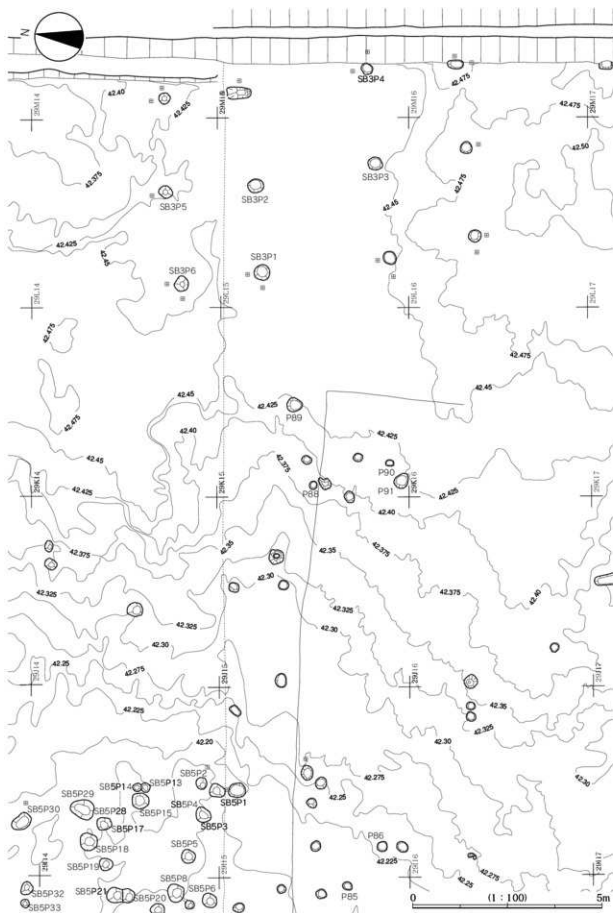


第28図 遺構個別図12

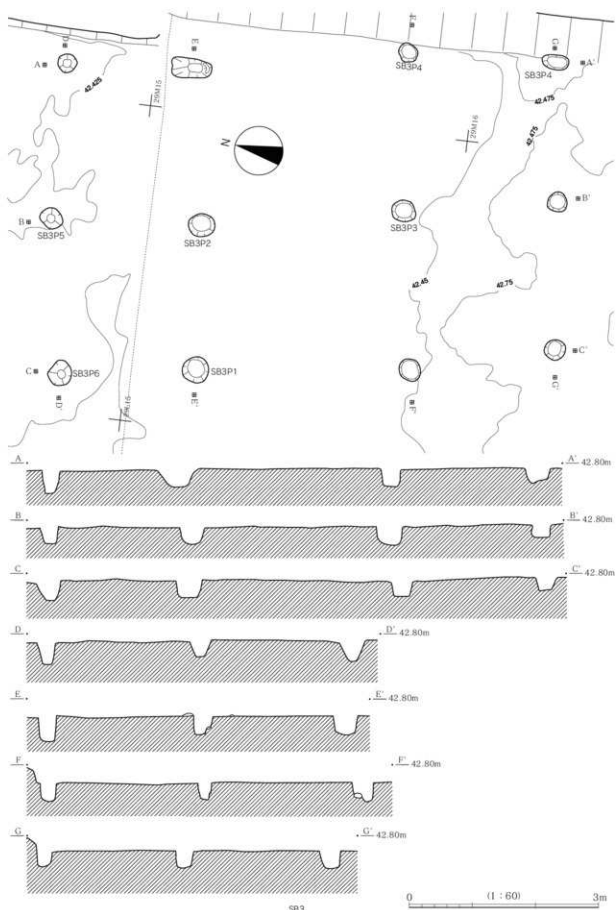




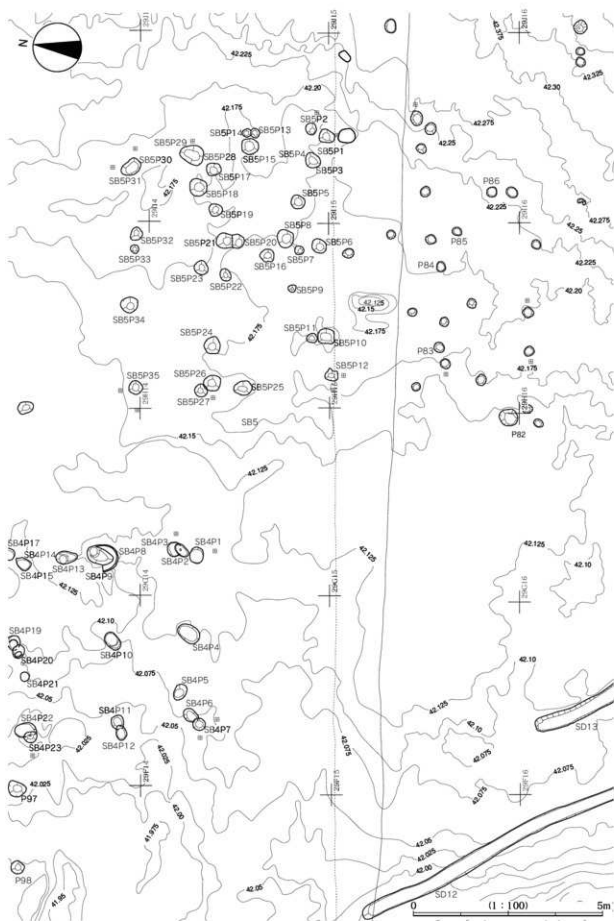
第29図 遺構個別図13



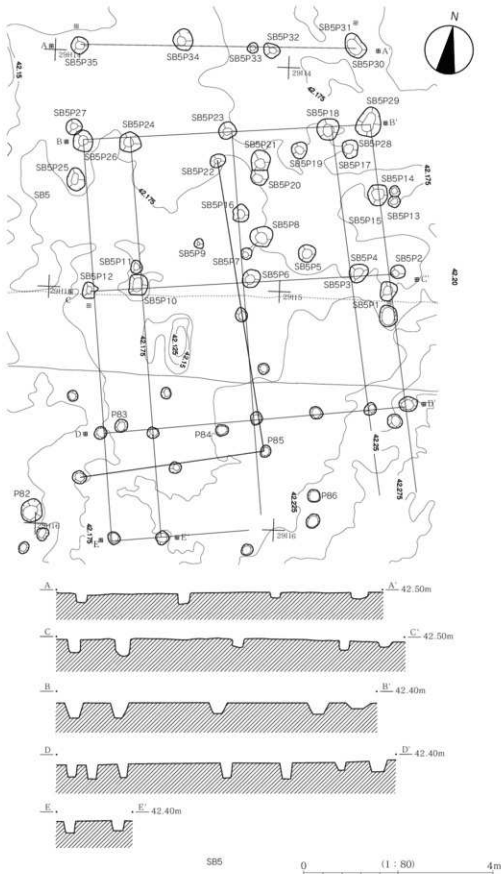
第30図 遺構平面図11



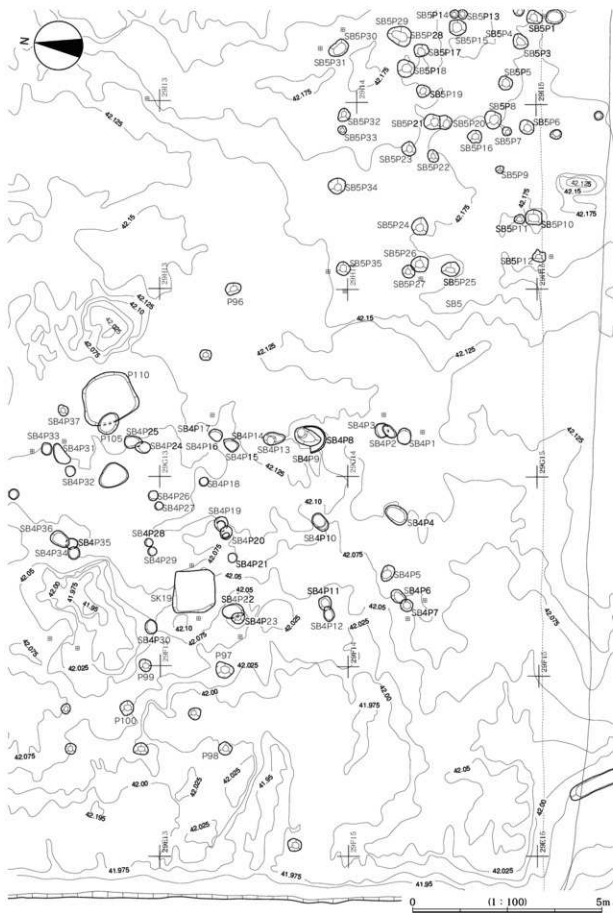
第31図 遺構個別図14



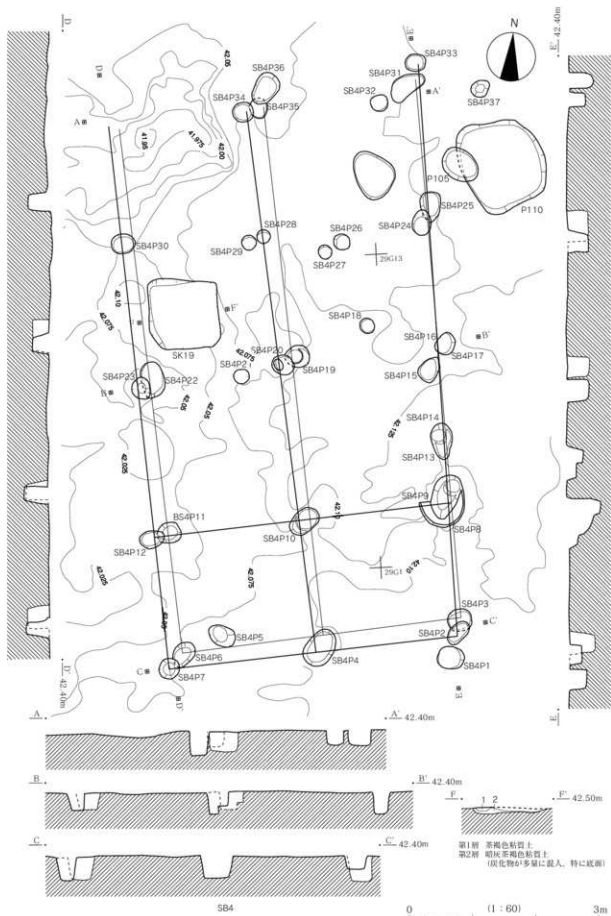
第32圖 遺構平面図12



第33図 遺構個別図15



第34図 遺構平面図13

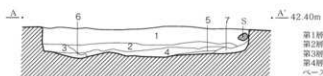
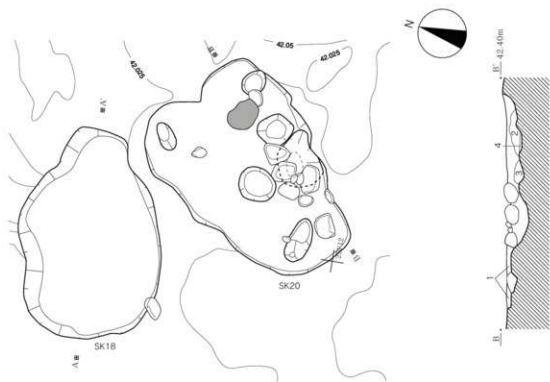


第35圖 遺構個別図16



第36圖 遺構平面圖14





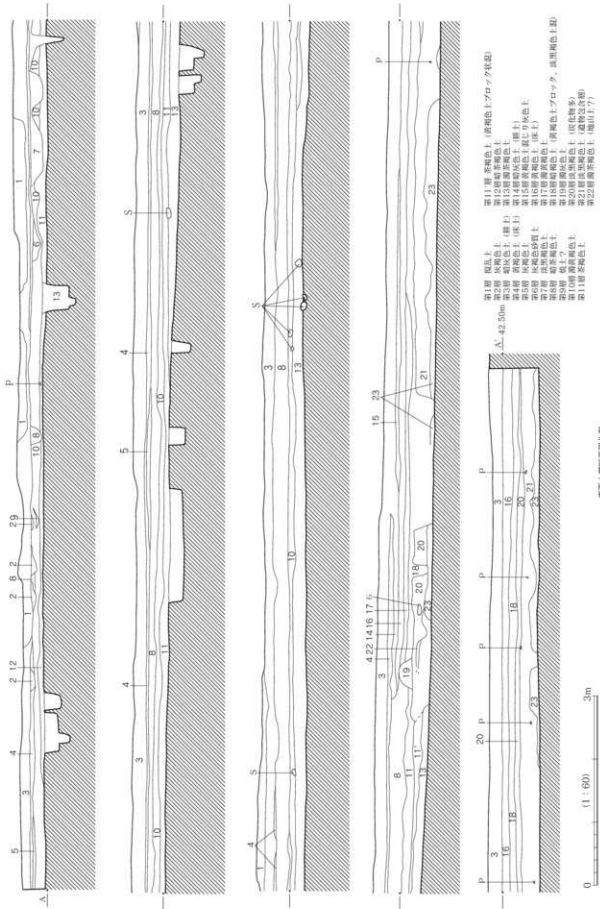
- 第1層 茶褐色粘質土 (褐色粘ブロック散入、炭化物散入)
- 第2層 暗茶褐色粘質土 (褐色粘ブロック散入、炭化物多量散入)
- 第3層 褐色粘質土 (炭化物散入)
- 第4層 暗赤茶褐色粘質土 (礫土)
- ベース 灰黄色粘シルト

0 (1:40) 2m

第37図 遺構個別図17



第38圖 遺構平面図15



第39図 遺構個別図18





## 第2節 遺物

弥生時代から近世までの遺物が出土している。時期ごとに粗密があり、また全く遺物の出土がない時代もある。ここでは遺構外から出土した遺物のうち時代ごとに特記すべきものを述べる。

### 弥生時代の遺物

弥生時代後期後半から末の遺物が一定量出土している。D・E17で下層確認トレンチが設定されているが、その部分からの出土が特に多いようである。他に170・171のような弥生時代前期と考えられる赤塗りをした条痕文壺が出土している。なお胎土中には多量の海面骨針を含んでいる。

### 古墳時代の遺物

古墳時代中期頃を中心とした遺物がF・G4～6といったところにまとまって出土している。これはSX4等との関連が考えられる。古墳時代後期の遺物はそれほど目立たず、須恵器の出土は無いようである。

### 古代の遺物

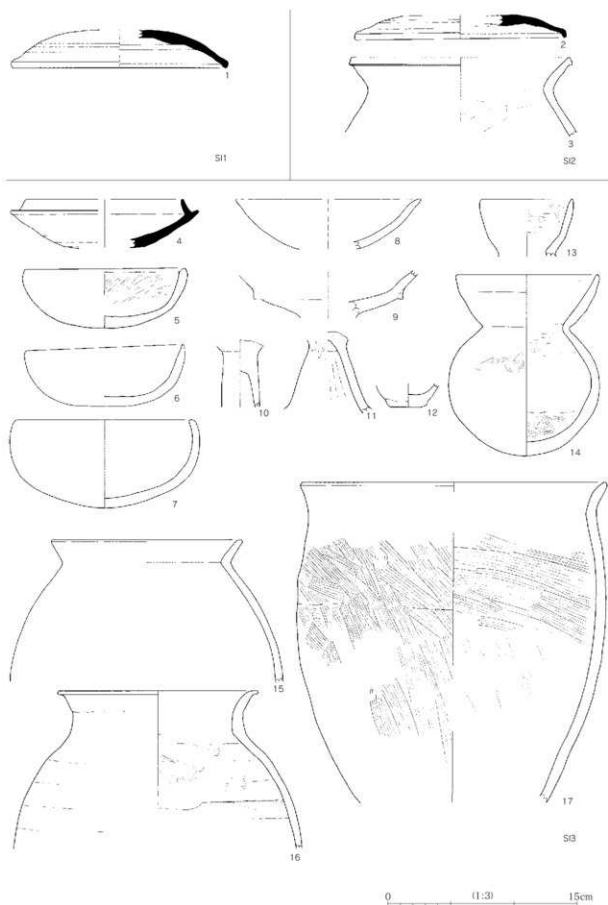
I1期と考えられる遺物から出土している。それほど包含層からの出土量は多くない。I2～II2期にあたる遺物の出土はなくなり、再びみられるようになるのはII3期からである。その後は途切れずVI2期頃まで続く。E17からは、暗文のある赤彩土師器杯が出土している。

### 中世以降の遺物

中世前半と考えられる遺物は、174・262・263・317などの土師器があげられる。その後は続かないようで、378～388などの中世後半以降近世・近代の遺物が散発的に出土しているようである。

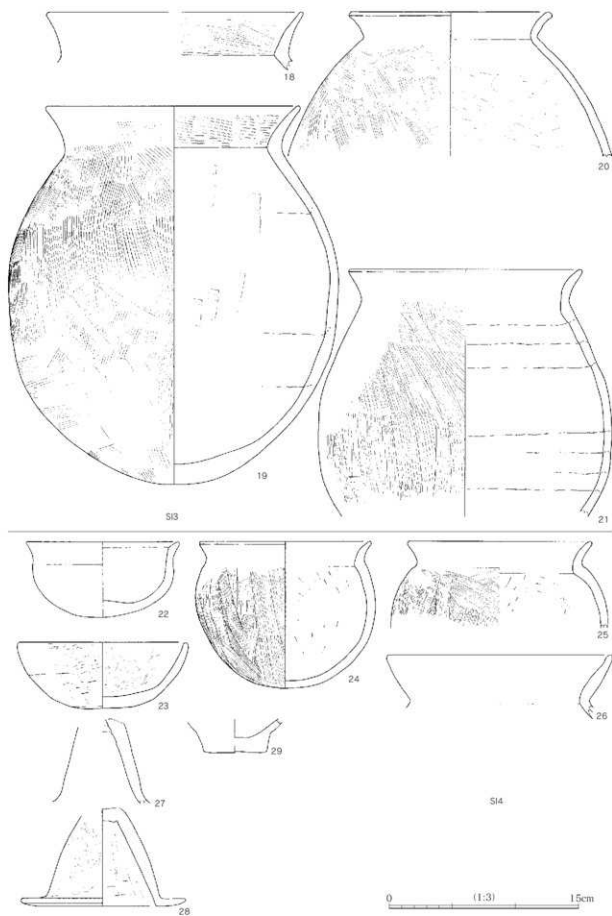
### その他

E・F16～18からは鯨骨や雁羽口が出土している。



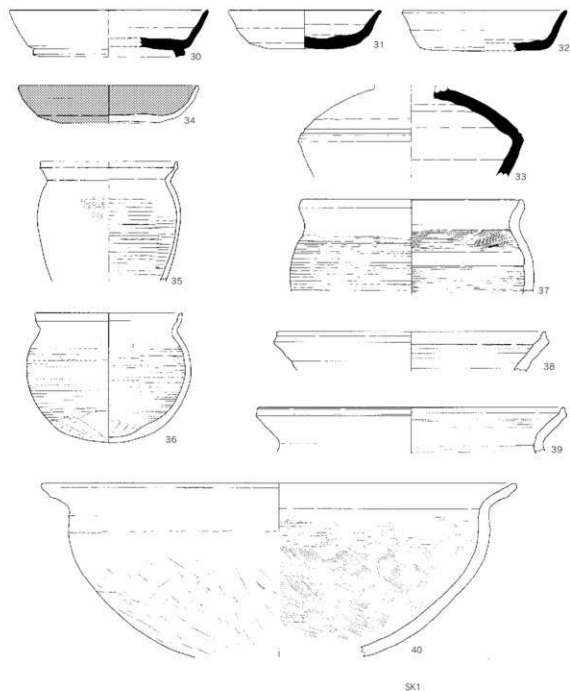
第42図 遺物実測図1

第2節 遺物



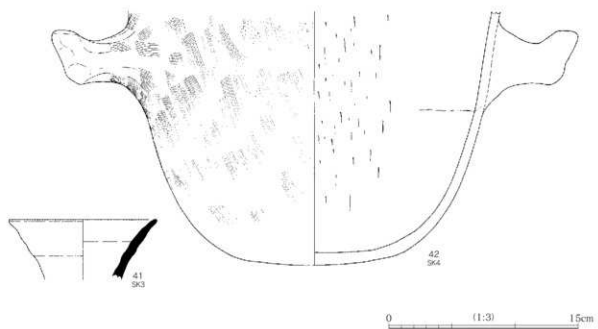
第43図 遺物実測図2

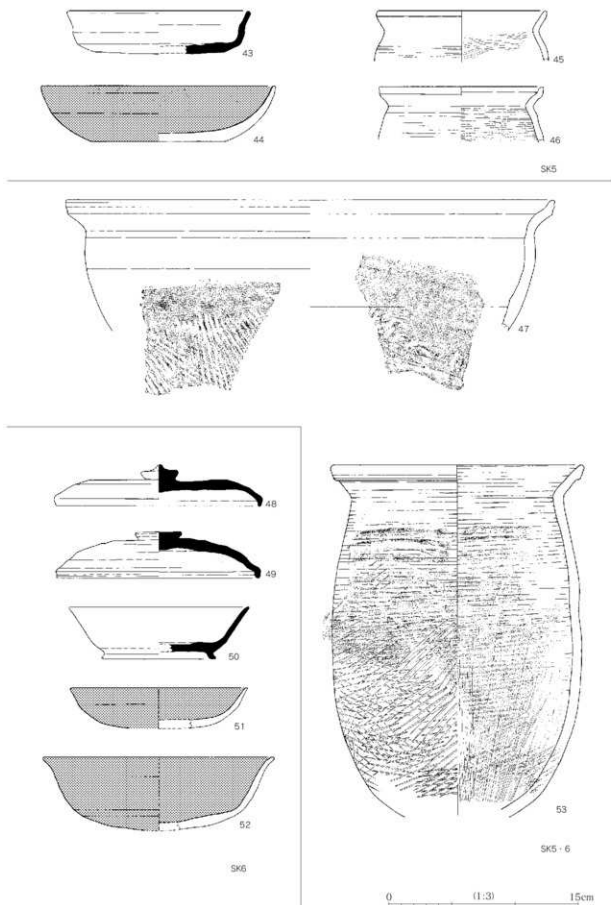




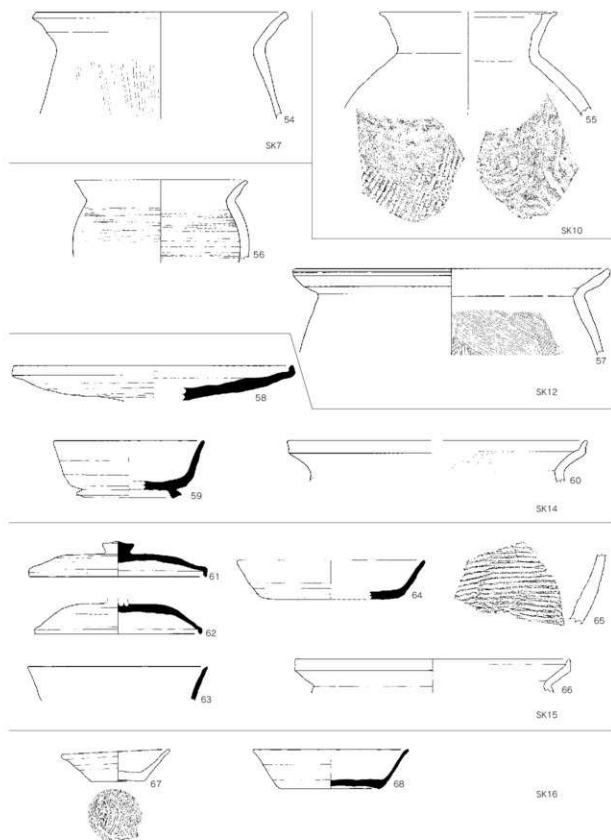
0 1.30 1.5cm

第44図 遺物実測図3



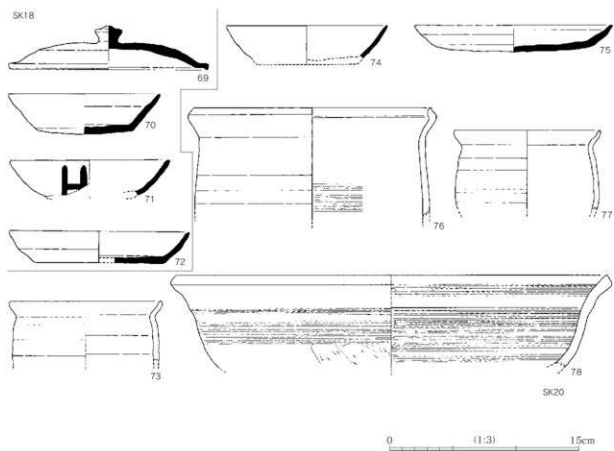


第46図 遺物実測図 5



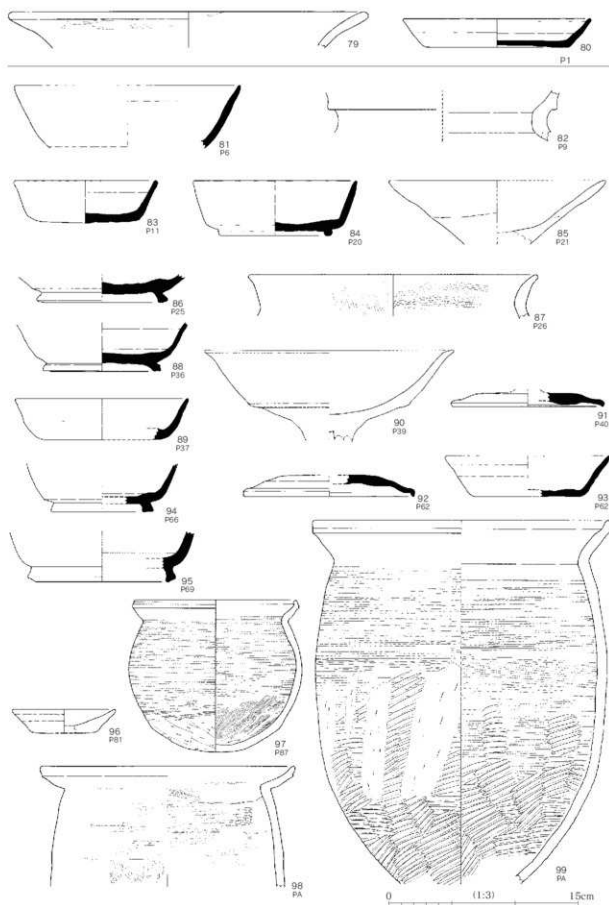
0 (1:3) 15cm

第47図 遺物実測図6

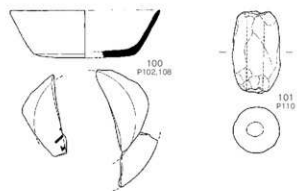


第48図 遺物実測図7

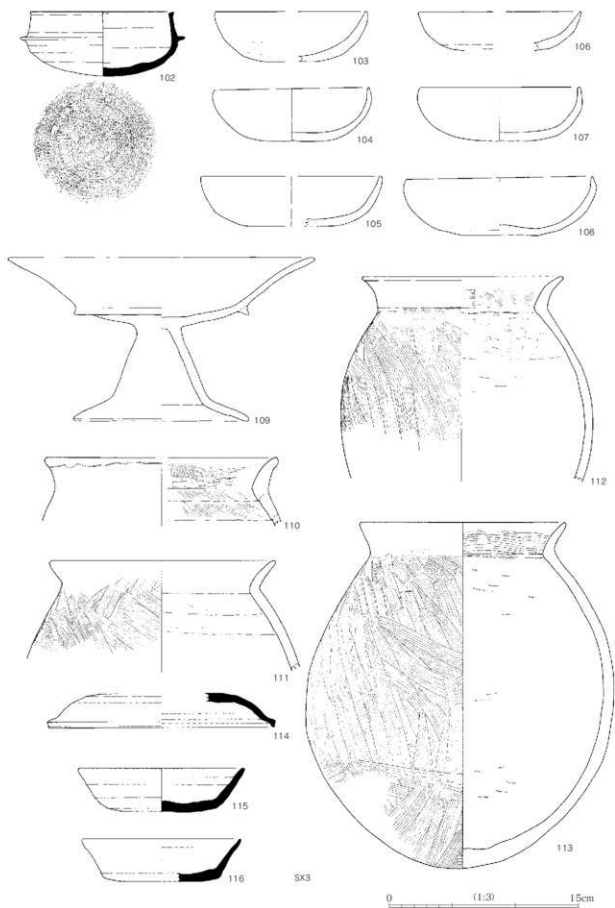
第2節 遺物



第49図 遺物実測図 8

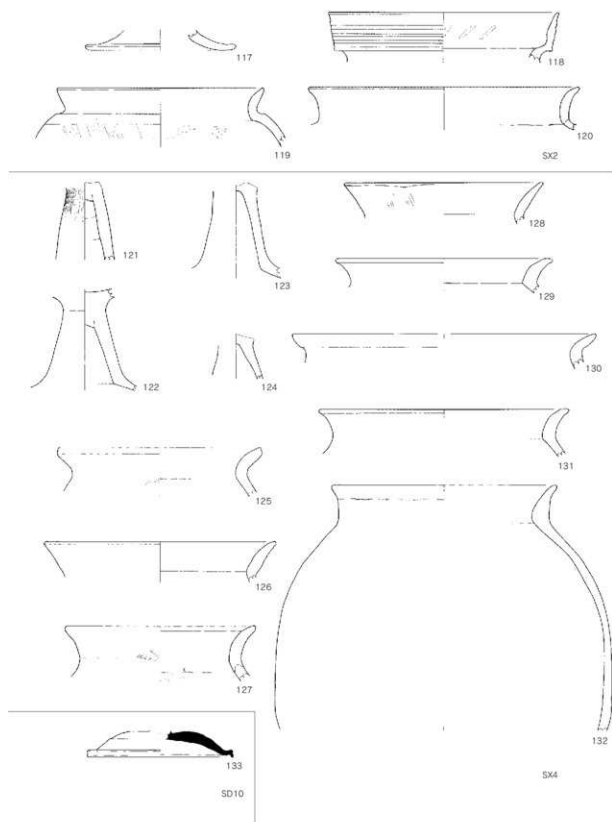


第2節 遺物



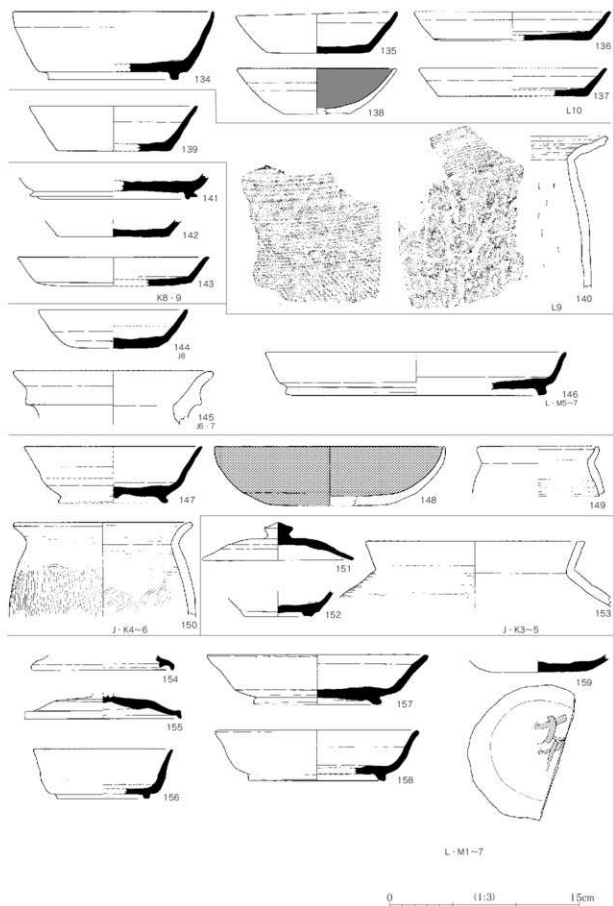
第51圖 遺物実測図10



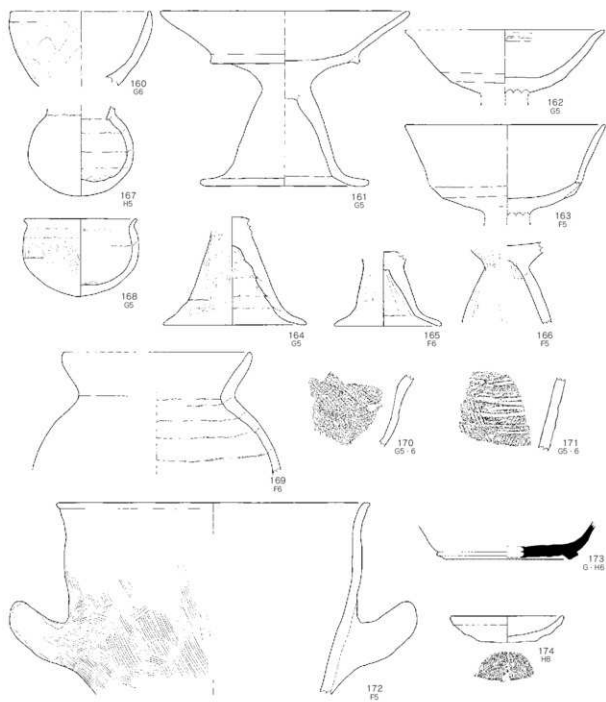


第52図 遺物実測図11

第2節 遺物

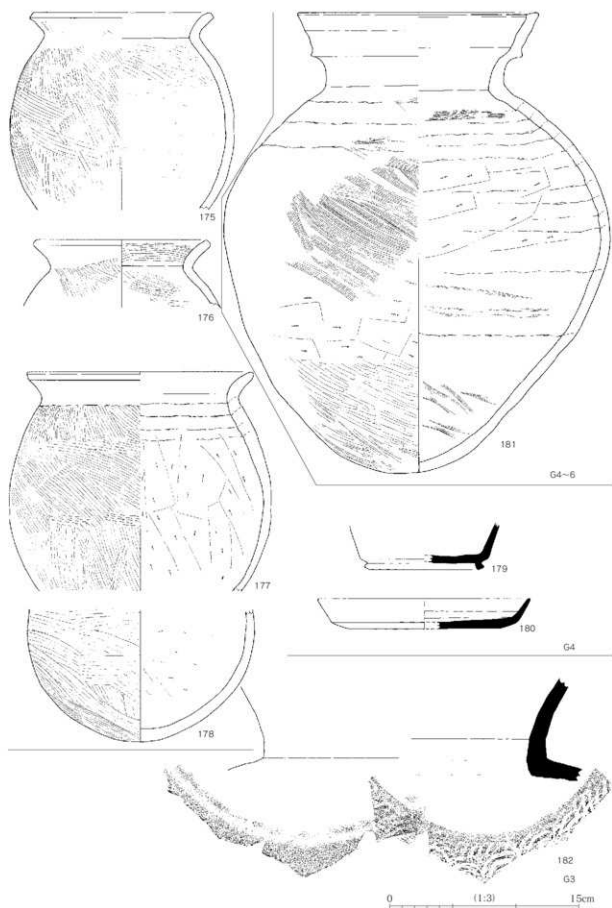


第53図 遺物実測図12

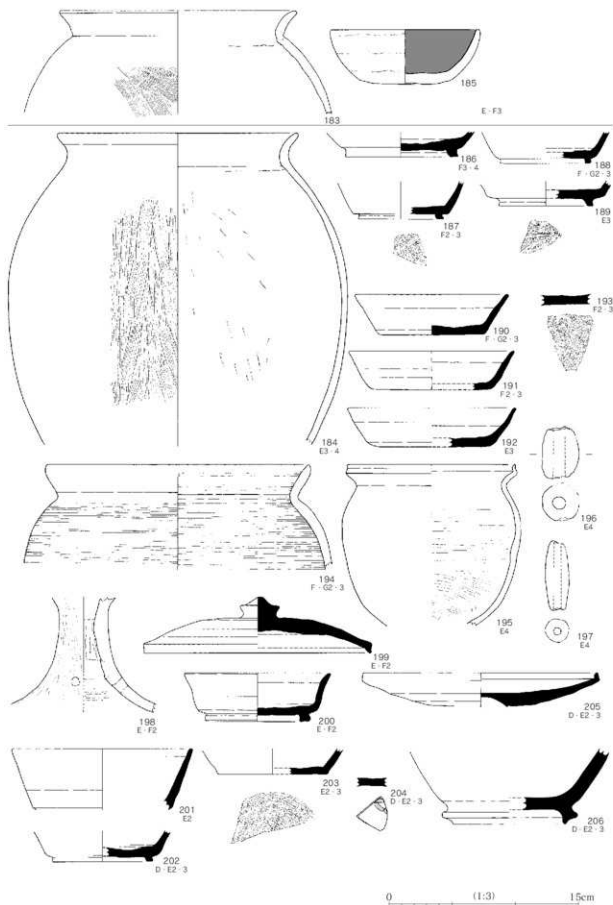


0 (1:3) 15cm

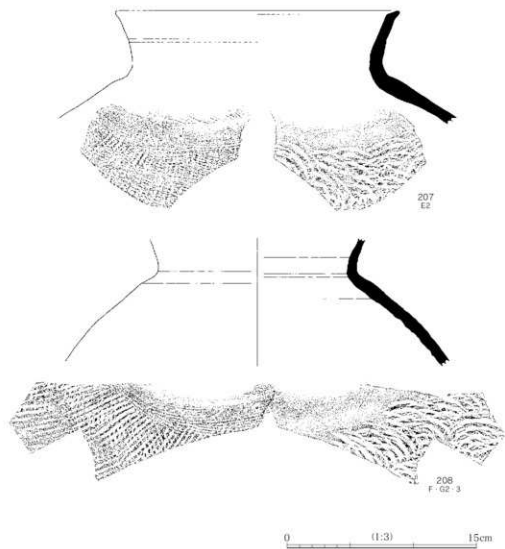
第54図 遺物実測図13

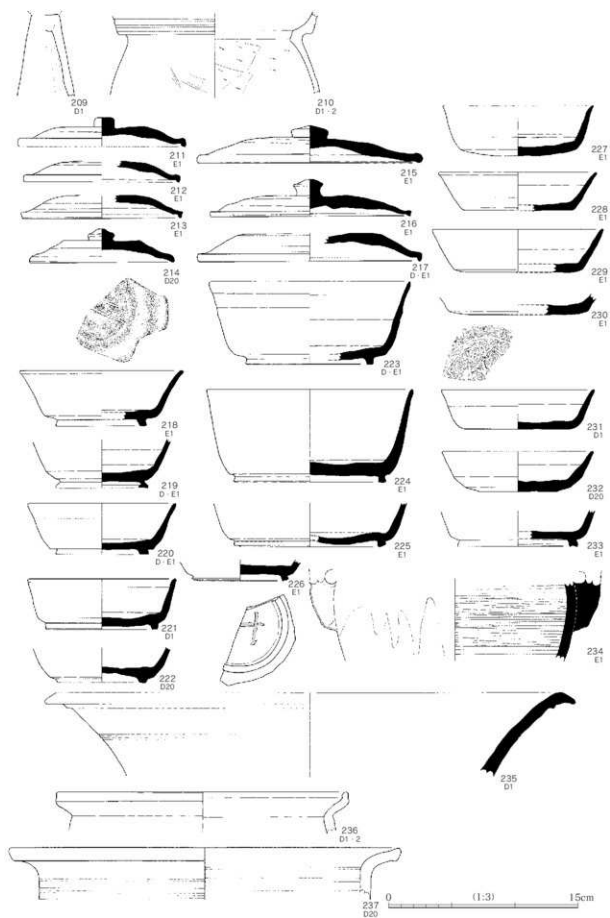


第55図 遺物実測図14

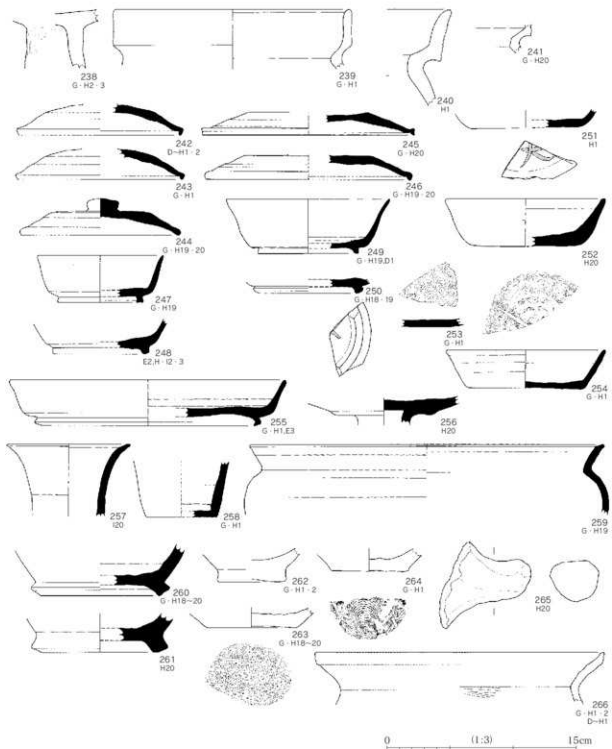


第56図 遺物実測図15



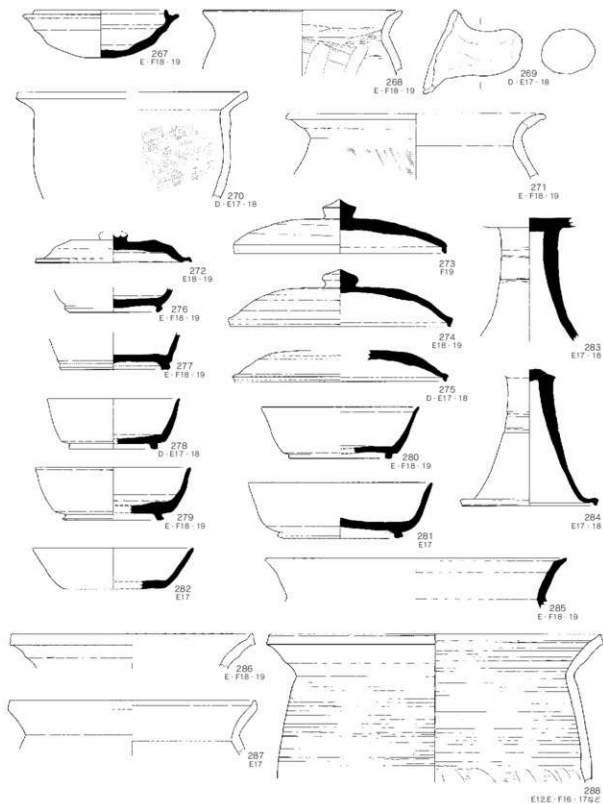


第58図 遺物実測図17



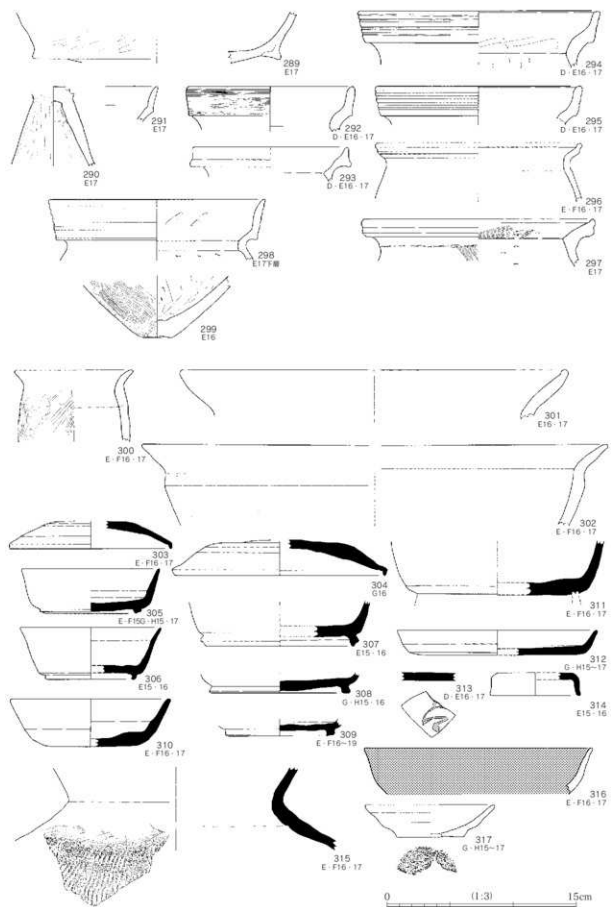
第59図 遺物実測図18



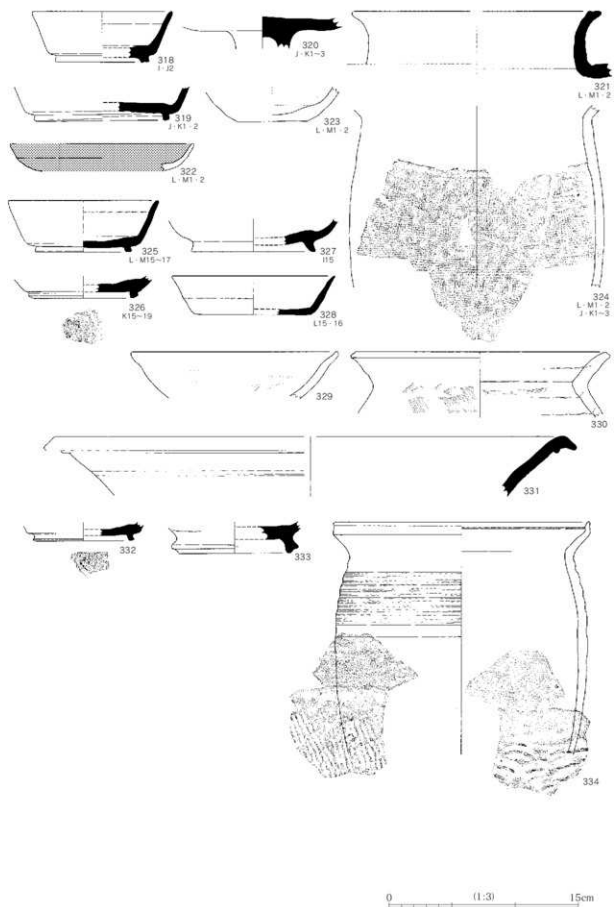


第60図 遺物実測図19

第2節 遺物

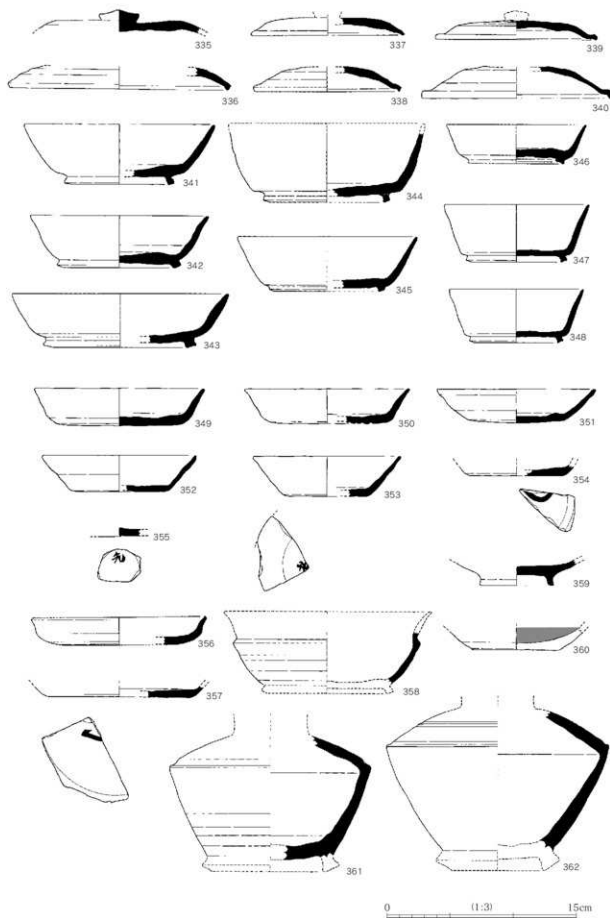


第61図 遺物実測図20

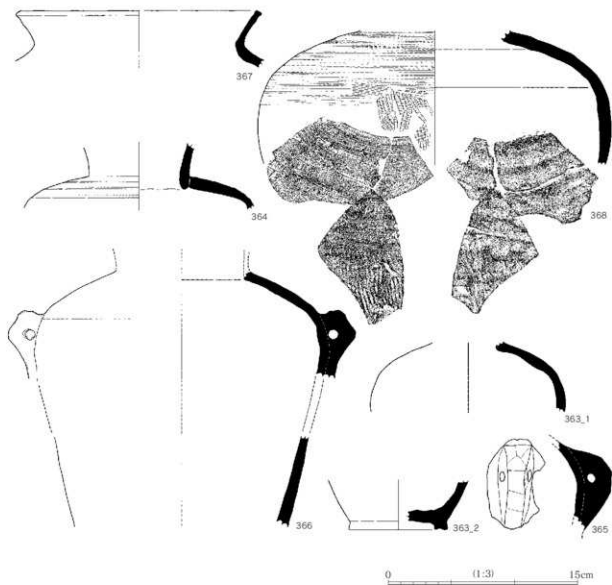


第62図 遺物実測図21

第2節 遺物



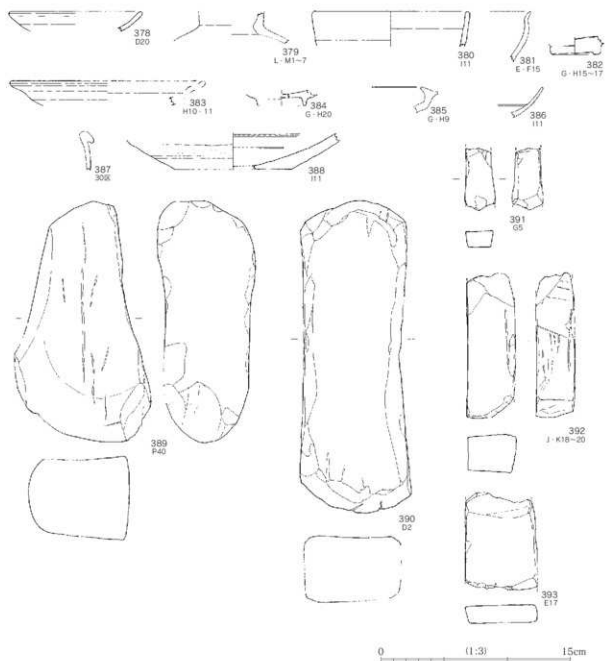
第63図 遺物実測図22



第64図 遺物実測図23



第65圖 遺物実測図24



第66図 遺物実測図25

### 第3節 土器の胎土分類と分析

#### 胎土の種類

須恵器の胎土をA～G・Xの8タイプに分けた。Aは南加賀、Bは能美、Cは末、Dは高松押水、Eは羽咋、Fは鳥屋、Gは非在地、Xは観法寺の各窯跡群産（北陸古代土器研究会1988）の須恵器と考えている。観法寺窯の製品については、窯跡群の調査が無く詳細については不明点が多いが、表採された資料が指江遺跡の発掘調査報告書（大西2002）で報告されており、その中で「胎土中に海面骨針を含む資料が多い点、断面が赤色化している資料が多い点」が胎土の特徴としてあげられている。また、観法寺窯周辺で観法寺ジヤマ窯跡他確認調査が2002年度に当理蔵文化財センターで行ったが、そのとき採集された須恵器を参考に分類した。観法寺窯跡はⅠⅠ期から開窯し末窯が開窯すると考えられる（出越1989）Ⅲ期まで生産が行われていたと考えられる。

土師器については、胎土中に海綿骨針が含まれているか否かを基準に大きく2つに分けた。海面骨針を含んでいるものをa類、含まないものをb類とした。また砂粒をほとんど含まないものを1、中量含むものを2、多量を含むものを3とした。砂粒の粒径によってさらに細分することも可能ではあったが、類別が多くなり判断しにくいこともあり、細別しなかった。

#### 須恵器の供給について

Ⅱ3期以降須恵器の産地別に供給の割合がどのように変化していくかについてみる。Ⅱ3期からとしたのは、ⅠⅠ期から木津遺跡では在地の須恵器のみみられるようになるが、古代の集落が継続的に営まれるようになるのはⅡ3期以降と考えられ、以降Ⅵ期までの資料が豊富だからである。

Ⅱ3～Ⅲ期の奈良時代前半期では南加賀窯の製品が多く、次いで能美窯の製品が多い。末窯に分類できる胎土のものも一定量を占め、高松窯と分類できるものもあり、ほぼ最初の段階からこの地域に供給する須恵器窯跡の製品が出揃っているといえる。Ⅳ期になると能美窯が南加賀と並ぶようになり、Ⅴ期以降能美窯の製品を主体として供給されていると考えられる。ただし圧倒的な割合を示すものではなく、すべての供給領域の縁辺にあたっているような様相を呈している。この割合は、供膳具と貯蔵具をまとめている。供膳具・貯蔵具に分けて示すと、Ⅱ～Ⅳ期においては、南加賀の供膳具・貯蔵具とも全体に占める割合は高い。Ⅴ期以降は能美窯・高松窯の供膳具の比率が高くなっている。また貯蔵具も能美窯のもの比率が高くなる。

それでは時期ごとの詳細な割合をみる。Ⅱ期では南加賀で39%、能美窯23%、末窯15%である。観法寺窯と考えられる製品も15%あり、残り8%を高松窯が占める。末窯と比定したものは開窯時期を考えると難しく、観法寺窯としたものに含まれる可能性がある。

Ⅲ期では南加賀窯61%、能美窯21%、末窯11%、高松窯7%となる。Ⅱ期と比べてそれほど大きな変化はない。南加賀窯製品の80%は供膳具である。

Ⅳ期では南加賀窯40%、能美窯40%、末窯6%、高松窯13%、鳥屋窯1%となる。この期になって能美窯の割合が増え、南加賀と肩を並べる。末窯・高松窯はⅢ期とそれほど割合は変わらない。

Ⅴ期では南加賀窯19%、能美窯35%、末窯10%、高松窯35%となる。能美窯が南加賀を逆転する。また高松窯の比率も増え、能美窯と同じ割合となる。いずれも供膳具の割合が高いが、能美窯のほうが若干貯蔵具の比率が高い。



VI期では南加賀窯29%、能美窯43%、高松窯29%となる。この期になり末窯の製品はみられなくなる。土師器については末窯産とみられるものがあり、須恵器生産が終了しても供給領域内にあるといえる。資料点数も少なくなりこの期が古代においての木津遺跡の終焉と考えられる。この期における貯蔵具はほとんどみられない。

### 土師器の産地

古墳時代の土師器には、海面骨針が含まれているものが多い。弥生時代前期の条痕文壺にも多量に含まれている。古代になると海面骨針が含まれているものはほとんど無くなる。これは、集落周辺で生産されていたものが、須恵器の窯場の周辺で焼かれるようになるという変化に伴うと考えられる。

仮に、海面骨針が含まれているものを在地産とすると弥生時代末の土器は、他所からの搬入品であるとも考えられる。

第2表 出土土器の時期と胎土

時期	須恵器								小計	土師器						小計	合計	
	A	B	C	D	E	F	G	H		a1	a2	a3	b1	b2	b3			
弥生前期									0			2					2	2
弥生後期									0			2		4	4		10	10
弥生末									0					3	3		6	6
古墳前期									0	1	2					1	4	4
古墳中期							1		1	18	7		6	9	7		47	48
古墳後期									0	1	3		1	2	6		13	13
I	2								2	1	2		1	6	7		17	19
II	5	3	2	1				2	13				1	5	9		15	28
III	17	6	3	2					28				1	7	10		18	46
IV	38	38	6	12		1			95					1	3		4	99
V	9	17	5	17					48				1	2	1		4	52
VI	2	3		2					7	2							2	9
中世I									0	1			1	2			5	5
中世II									0				1				1	1
合計	73	67	16	34	0	1	1	2	194	24	15	4	13	41	51		148	342

※表中の数値は実測した遺物点数

















## 第4節 小 結

今回報告した本津遺跡は、もともと末松遺跡として発掘調査が行われたものであり、29区より北側部分に関してはトレンチ調査が行われているが、遺構は確認されていないようである。遺跡が連続していないことが確認され、本津遺跡が設定された。そのとき別遺跡となった末松A遺跡とは300mほど離れている。おそらく鞍部を挟んでいるものと考えられ、手取川扇状地にみられる鳥伏微高地（小嶋ほか1991）では、安養寺遺跡と同じ微高地にあると考えられる。

本遺跡の消長を遺物・遺構からみると次のようにまとめることができる。弥生時代前期の遺物が少量ながら認められることから、大規模とはいえないまでも周辺に集落が営まれた可能性が指摘できる。その後、弥生時代後期～末の遺物が一定量みられることから、集落が形成されたと考えられる。遺跡になるような遺構は、下層トレンチ内で検出されたピット群しかないが判然としない。おそらく大規模な集落に発展したとは考えられず、また継続されることもないようである。古墳時代中期になって遺物の出土量は大きく増加し、再び集落が形成される。この期になって初めて本遺跡で竪穴建物がみられるようになる。それ以前と比してははっきりとした遺構がみられるようになる。しかしこの集落もおそらく継続されず、Ⅰ1期になって再度集落が形成される。この集落も単発的なものようで、Ⅱ3期になってようやく集落が安定しⅥ2期頃まで継続する。Ⅰ1期は竪穴建物を主体として遺構が確認されているが、Ⅱ3期以降掘立柱建物もみられるようになる。掘立柱建物の個別の時期については判然としないものが多いが、SB1・6としたものを除けば南北棟であり、またその建物の主軸方位は、ほぼ北から西に約15°前後振っていることからほぼ同じ時期と考えられる。包含層や周辺の遺構等からの出土遺物を参考にその時期を考えると、Ⅴ～Ⅵ期頃の建物と考えることもできる。しかし、それらの建物はすべて総柱であり、この期ではまだ倉庫的な機能を担っている（川畑1995b）と考えられている段階でもあり、Ⅶ期に下がる可能性もある。また、それらの建物周辺にみられる小溝群は高の畝溝群と考えられ、それぞれに付属しているものであろう。SB1・6についてはSI1・2に伴うものである可能性もあり、Ⅱ3～Ⅲ期と推測する。また、これらの建物の周辺のピット群は、掘立柱建物の柱穴と考えられるものであり、Ⅳ期以降のものである可能性がある。弥生時代後期～Ⅰ1期までは、散発的に集落が形成されるようで、なかなか安定しない状況があったと考えられる。

本遺跡で得られた成果を周辺の遺跡の動向を含めて若干考えてみると、以前、川畑誠氏がまとめられた（川畑1995a）手取川扇状地の集落遺跡の動向とよく一致していることがわかる。第1の画期は7世紀末葉頃に集落が顕性化するのをあげられているが、本遺跡でも安定的に集落が形成されるのはこの頃と考えられる。第2の画期とされる8世紀中頃については、掘立柱建物は良くわからないが、包含層から出土する遺物を含めてその出土量が多くなることから、集落の隆盛期を迎えると考えられる。第3の画期とされる9世紀中葉は、扇状部下半で集落遺跡が一斉に衰退、消滅する過程とされる。本遺跡でも総柱の掘立柱建物の時期によるが、消滅する段階と考えられる。第4の画期とされる10世紀前半～中頃は、扇状部一帯で集落遺跡数が減少過程に入ると考えられている。第3の画期にあたる掘立柱建物がこの時期にあたるかもしれないが、この画期以降同じ微高地にあたると考えている安養寺遺跡群に集落が移っている可能性もある。

また手取川扇状地を中心に研究されたものに横山貴広氏の論考（横山2003）があるが、その中で末松庵寺が建立される背景について、上林新庄遺跡群で検出された横穴式石室を採用した新興勢力等周辺の先行する在地領主層を取り込んで、人心を掌握する手段として末松庵寺を建立したのではないか

と考えられている。横穴石室をもつ上林古墳が造られた7世紀前半に本遺跡でも一旦集落が形成されることは、新興開発領主層の存在を示すものと考えられる。継続せず単発で終わってしまうことは、手取川の氾濫等の自然条件があったと仮定しても、その勢力も極めて不安定なものであったと考えられる。7世紀後半以降安定的な勢力による支配が行われたと思われるが、それがどのクラスによるものか、またどのような体制であったのかについては、末松庵寺の建立等の問題を含めて考える必要があるだろう。その手かりとなるのが、II2・II3期といった7世紀後半から8世紀初頭に見られる近江型や丹波型の煮炊具を始めとした外来系の人々の痕跡である。在地の人々を駆逐したのか、それとも吸収、ないしは融合したのかは重要な課題である。

鶴来バイパス関連の発掘調査はそのほか末松A遺跡や清金アガトウ遺跡などが行われており、また周辺では農村活性化環境整備事業等が行われ、その成果が明らかとなっている（本田・安2000）。それらの成果を合わせるにより、手取川扇状地における集落の動向がさらに明らかとなることを期待する。

## 引用・参考文献

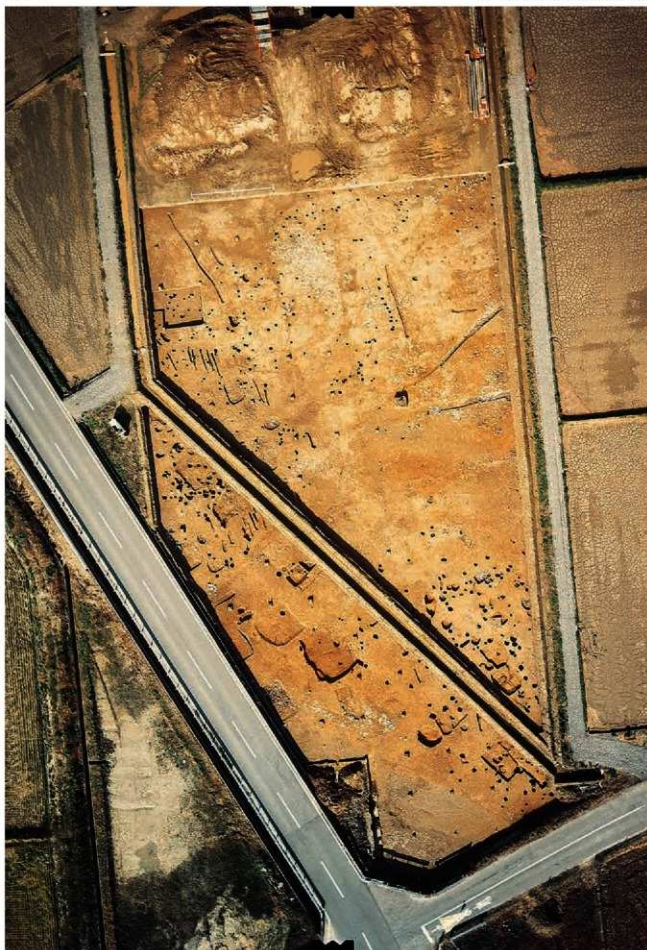
- 大西 顕 2002 『観法寺瓦器窯跡』『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』財団法人石川県埋蔵文化財センター、278-281
- 川畑 誠 1995a 『柴木D遺跡の調査』『鶴来北部遺跡群調査報告II - 船宮岡整備事業鶴来地区埋蔵文化財発掘報告2 -』石川県立埋蔵文化財センター、5-8
- 1995b 『石川県内の古代建物に関する基礎的考察 - 掘立柱建物の平面プランを中心に - 』『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報6』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、62-103
- 北野博司 1987 『出土土器の観察』『藤原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター、78-82
- 小嶋芳幸ほか 1991 『粟田遺跡発掘調査報告書』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
- 財団法人北陸建設弘済会金沢支所 1991 『道路事業のあゆみ』建設省北陸地方建設局金沢工事事務所
- 田嶋明人 1988 『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題 報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 出越茂和 1989 『金沢における八～十世紀の食器土器』『金沢市末松跡群』158-183
- 北陸古代土器研究会 1988 『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題 資料編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 本田秀生・安英樹ほか 2000 『野々市町末松遺跡群』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 望月精司 1991 『戸津古窯跡群I』石川県小松市教育委員会
- 2002 『二ツ栗一貫山窯跡』石川県小松市教育委員会
- 横山貴広 2003 『扇状地における新興開発領主層の台頭とその後の展開 - 古代（6世紀末～9世紀中頃）手取川扇状地を中心として - 』『嵐気楼 - 秋山進年先生古稀記念 - 』高山大学考古学研究室論集 秋山進年先生古稀記念論集発行会、六一書房、319-338
- 本田 清 1996 『胎土から見た須恵器の流通と食器組成』『東大寺領横江庄目』石川県松任市教育委員会、241-251



道跡近景 (南西から)



道跡近景 (北から)



1984年度調査区全景 (上空から)



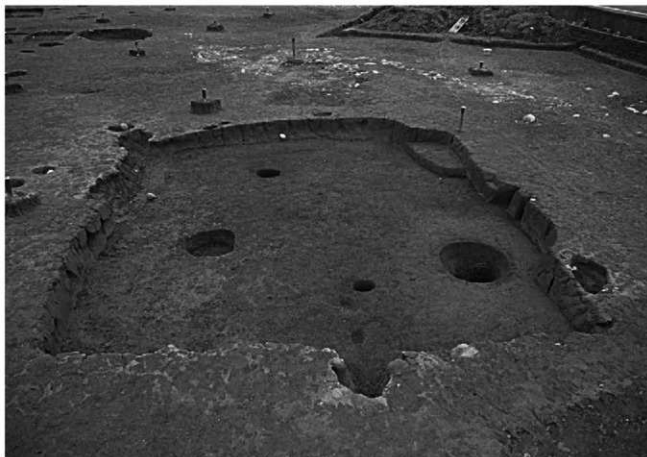
S11,S12完掘状況 (南東から)



S11,S12完掘状況 (北西から)



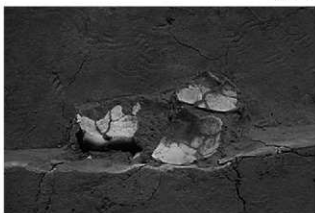
S13遺物出土状況（南東から）



S13完備状況（北西から）



S13 遺物出土状況近景



S13 遺物出土状況近景



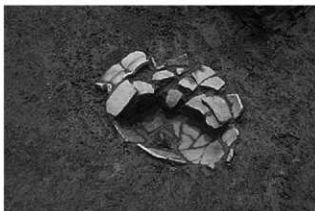
S13 遺物出土状況近景



S13,P3 遺物出土状況



S13上面遺物出土状況近景



S13上面遺物出土状況近景



S13上面遺物出土状況近景



S13 遺物出土状況近景



SI4完麗状況（南東から）



SI5完麗状況（北西から）





SX1完掘状況（北東から）



SX2完掘状況（南東から）



SX3遺物出土状況（南東から）



SX3遺物出土状況近景



SX3遺物出土状況近景



SX3遺物出土状況近景



SX3遺物出土状況近景



SX3遺物出土状況近景



SX4遺物出土状況（北西から）



SB1完備状況 (北西から)



SB1完備状況 (南西から)



SB2完成状況（北から）



SB2完成状況（東から）



SB3完備状況（西から）



SB3完備状況（北から）



SB4完掘状況（西から）



SB4完掘状況（北から）

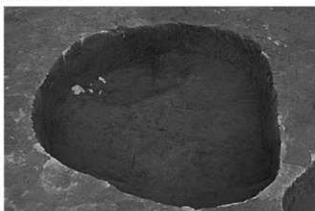


SB5完備状況（東から）

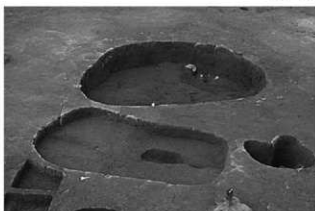


SB5完備状況（北から）

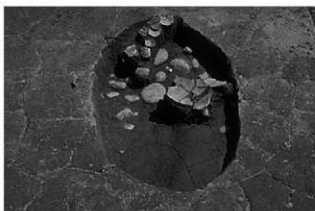




SK1完掘状況（東から）



SK1,SK2完掘状況（北東から）



SK4遺物出土状況（北西から）



SK5遺物出土状況（西から）



SK5遺物出土状況近景



SK6遺物出土状況（北西から）



SK6遺物出土状況近景



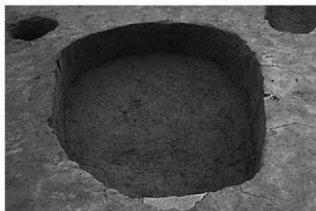
SK6遺物出土状況近景



SK5,SK6完掘状況 (北西から)



SK7完掘状況 (南西から)



SK8完掘状況 (北東から)



SK11完掘状況 (北東から)



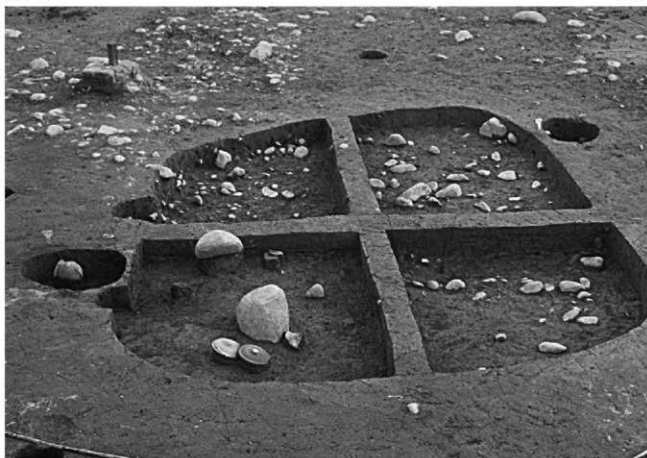
SK12完掘状況 (南東から)



SK14遺物出土状況（北東から）



SK14遺物出土状況（南東から）



SK15遺物出土状況（北から）



SK15遺物出土状況近景



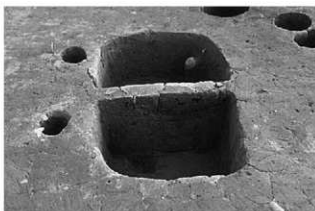
SK15遺物出土状況近景



SK16完掘状況（北東から）



SK15立石間の横土



SK16土層断面（北西から）



SK16完掘状況（北西から）



SK16遺物出土状況近景



SK19土層断面（南から）



SK18土層断面（南から）



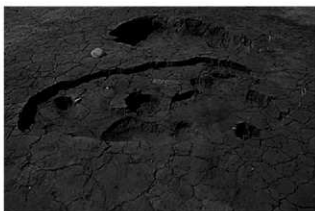
SK18完掘状況（北から）



SK20内焼土検出状況（東から）



SK20遺物出土状況（北西から）



SK20完掘状況（南東から）



方形土坑土層断面（北東から）



下層トレンチ完掘状況（東から）



P87遺物出土状況（北から）



P36遺物出土状況（北から）



包含層出土遺物



包含層出土遺物



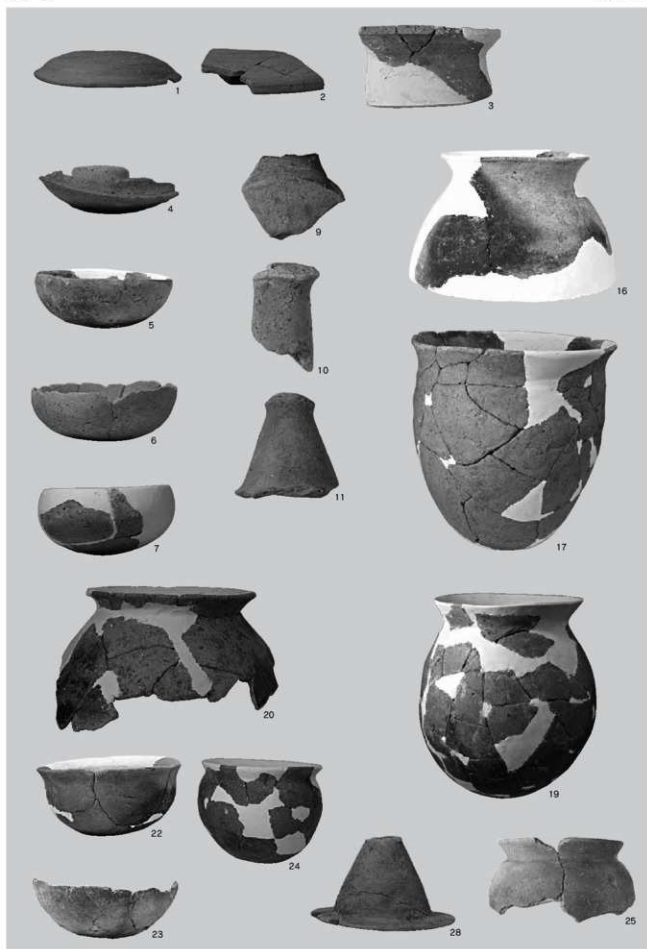
作業風景



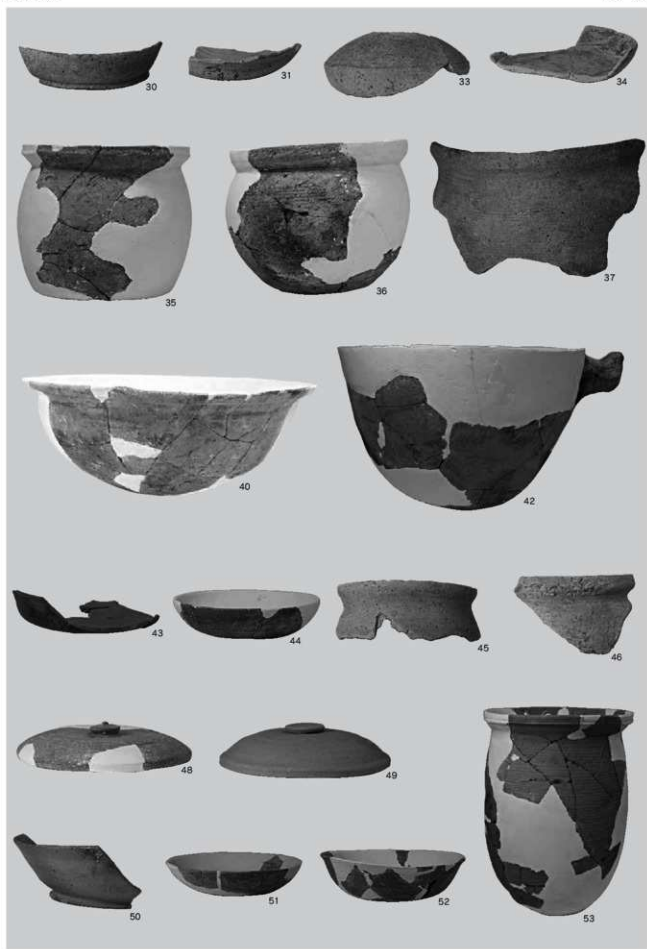
作業風景



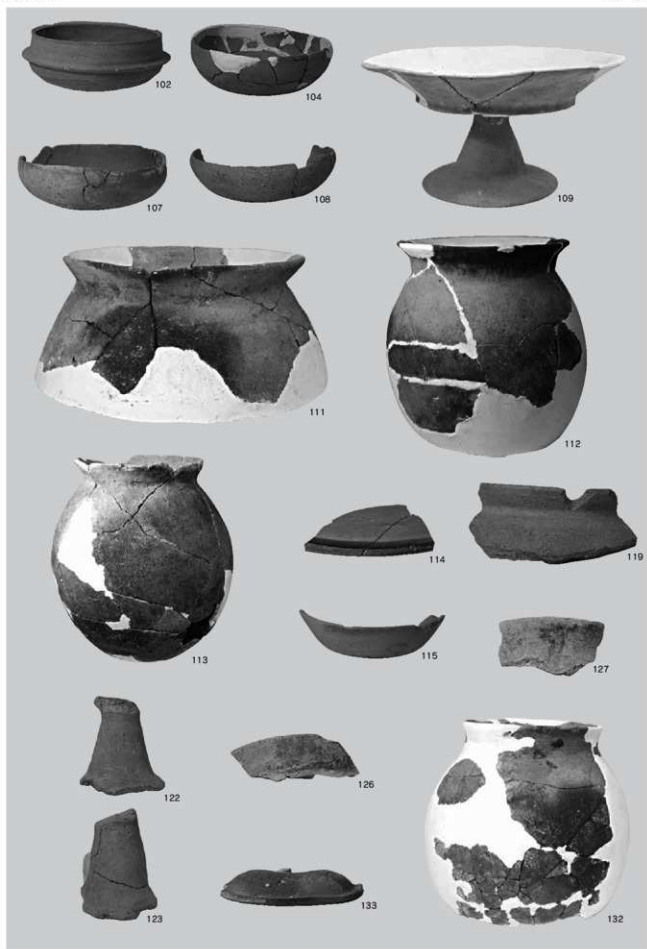
第1次調査区完掘状況（北から）

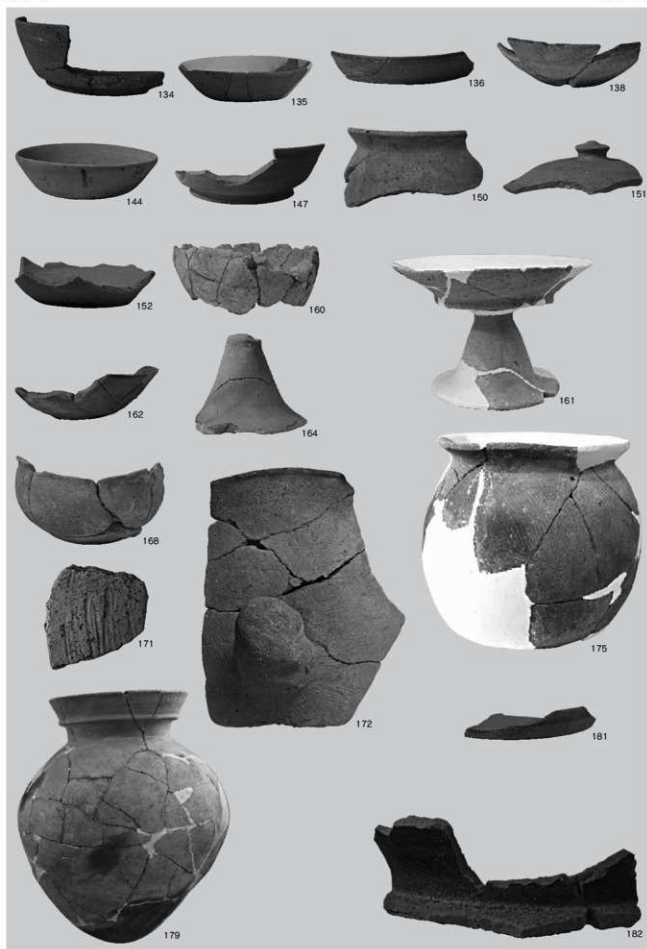
















松任市 未松遺跡群 I

発行日 平成16 (2004) 年 3月31日  
発行者 石川県教育委員会  
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地  
電話 076-225-1842 (文化財課)  
財団法人 石川県埋蔵文化財センター  
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
電話 076-229-4477  
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp  
印刷 能登印刷株式会社